

Ⅲ. フォーラム

1. 開会挨拶

丹波地域大学連携フォーラム実行委員会 会長 客野 尚志

皆さんこんにちは。

今日は遠いところ、天気の良いところお越しいただきまして、ありがとうございます。関西学院大学の客野と申します。会長となっておりますが、実行委員会の一人ということでご挨拶させていただきます。

7回目になるのですが、これだけ学生の活動が続いて、またそれを受け入れてくださる地域の方がおられて、また、バックアップしてくださる県民局や両市の方々に本当に感謝しかありませんので、まずお礼を申し上げたいと思います。

最近、大学の方でも「地域で学べ」、「フィールドで学べ」と、大学の学びの内容が大分変わってきていますし、学生も「地域で学びたい」とか「フィールドワークをしたい」という学生が増えていますので、そういった中でこういう受け皿となっていていただいている丹波地域というのは、本当に我々にとってはありがたい限りかなと、常に考えております。

個人的なことです。最近、大阪の本屋さんへ行ってブラブラ立ち読みをしていて、『将来を変えるかもしれない、未来を変えるかもしれない技術』という本を読んでいました。例えば、ドローンであるとか大規模木造建築物とかいろいろ書かれている。そのうちのひとつに AI も当然書かれていて、人工知能です。人工知能に関しては、1年ほど前にアメリカの研究者の方が、AI がこのまま発達したら無くなってしまふかもしれない職業というリストを出して、新聞でも大分報道されていて学生の皆さんもご存じかもしれません。学生や卒業生と話をしても「自分の将来が大丈夫かな」とのこと、そのような声を耳にするのですが、当然残る仕事もあると言われていて、そのうちのひとつが、人間の心とか人間の感情の機微を理解しないといけないような仕事。これは残ると言われていますが、地域づくりもまさにそういったことでないかと思っております。同じことをしても、そこにおられる人やそこに関わっている学生さんとか行政の方とかそれぞれの思い、考え、感情があつて、これは、その都度変わっていくものですし、そういったものをうまくコーディネートしていかないと、絶対に成功するものではないと思っています。こういった取り組みをずっとなされてきた皆さんは、まさにコンピューターでは代替できない活動をされてきたと思っております。

今日は 4 時間と長い時間になりますが、こういう貴重な取り組みを見させていただいて、我々は勉強することを楽しみにしています。また、学生さん同士もお互いの取り組みを見ながら、「ここはこんな風になっているんだ、面白いな」という形で、今後の活動の展開にプラスにしていいただければ、本当にありがたく嬉しく思っております。

今日のこの会場のセッティングとか、後々、司会進行とか、関西大学佐治スタジオの出町先生、植地先生にお二人に大分お世話になりまして、改めて御礼申し上げたいと思いますし、きっと楽しい会にしていいただけると期待しております。

今日は長い時間になりますが、よろしく願いいたします。

2. 主催者挨拶

丹波県民局長 柳瀬 厚子

こんにちは。

本日は大学生の皆様、地域の関係者そして大学関係者の皆様とこれだけ多くの方にお集まりいただき、丹波地域大学連携フォーラムにご参加いただきまして感謝申し上げます。

また、地域の皆様には大学生の活動に際しまして日頃からご支援いただいておりますことに感謝申し上げます。

この衣川會館はお聞きしますと、兵庫県議会の議長をされておりました衣川さんがお住まいになられていた建物ということで、こういう建物が衣川會館として大学生、また地域の方の交流の場となり、また、大学の多くの皆さんにお越しいただき、こういう機会が持てるというのは大変頼もしく思いますし、これからこの會館が充分活用されますことをお祈りしております。

さて、この丹波地域というのは皆様もご承知のとおり大学がございませぬ。そういったことで丹波地域の高校生は高校を卒業しますと丹波地域を離れていってしまつて、なかなか若い人が帰つてこないことが大きな課題となっております。地域創生戦略を策定するにあたりまして、特にこの若い人たちの流出の方が多いということで、いかに若い人達を地域に呼び込んでいくかということが非常に大きな課題になっているところです。

ですけれども、丹波地域には青垣町佐治の関西大学の他に丹波市柏原町では関西学院大学、そして先ほどもお話がありましたけれども篠山市には神戸大学ということで、3つの大学がこの丹波地域に活動拠点を置いていただいております。そのほか、実践講座、フィールドワークで、多くの大学の方達も丹波地域に訪れていただいております。

こうした中で、丹波県民局では平成24年度から『学生等による地域貢献活動推進事業』を創設いたしまして、篠山市、丹波市と連携して学生の活動を応援していこうと進めています。この取り組みも年を追うごとに定着して、大学からの申し込みも非常に多くなり今年は8団体ということで活動を進めていただいております。特に大学のない丹波地域では、お祭りとかいろんなイベントがあつても若い人がそこで活躍するというのがなかなか見えにくい地域です。けれども、そういった中で大学生の方が揃いのジャケットを着て、私もいろんなお祭りでお見かけいたしましたけれども、非常に盛り上げていただけるのが、本当に頼もしく思っておりますし大いに期待しているところです。

今日は『丹波地域大学連携フォーラム』ということで、学生団体の方からの活動報告、意見交換を行ひまして、活動内容の向上と、学生同士の交流を図っていきたいところです。今回は、学生と地域双方の地域貢献活動の未来について考えを深める機会ということで、実際に活動している大学生の皆さん、地域活動をしていただいている皆さん方、多くの皆さんに集まいただきました。大学生の皆さん方には、それぞれの活動報告をしていただきますけれども、他の学生の皆さん、地域の方とも意見交換を進めていただいて、これからの自分達の進む活動また、丹波地域の未来もあわせて考えを巡らせていただけると嬉しいなと思っております。

この丹波での経験というのが大学生の皆さんにとっては貴重な経験になれば嬉しいと思いますし、この経験がさらに社会に出て行って活かされるということを言っていただければ嬉しいですし、また丹波地域に戻つて何らかの形で活躍をしていただければ、さらに嬉しいと思っております。

最後に、このフォーラムが有意義なものになりますことを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。今日は6時まで長いですが、皆さん、頑張つて話し合つて、よろしく願いいたします。

3. 青垣町佐治での空き家活用の取組み

関西大学佐治スタジオ 研究員 出町 慎

皆さん、こんにちは。関西大学佐治スタジオの出町といいます。

当初の企画では、学生の皆さんと佐治のまちを歩きながら空き家の再生について、ああや、こうしゃべりながら思っていたのですが、皆さんの発表時間を充実させようということで、そこらへんをバサッと省いて、空き家の活用のことだとか、関西大学佐治スタジオがどういった活動をしているのか簡単に紹介したいと思います。

関西大学佐治スタジオは先ほどご紹介いただきましたが、10年くらい前の2007年、この青垣町佐治に立ち上げた空き家を活用した活動拠点で、ここを拠点にしながら、関西大学の学生たちが2つテーマを持って活動を始めました。

『関わり続けるという定住のカタチ』と『21世紀の故郷作り』というテーマです。「この『関わり続ける』というのは何やねん」という話ですが、皆さんもいろんな地域で関わって活動をしておられると思いますけども、まさにそういうことです。とりわけ僕たちが活動を始めた頃は、「丹波市の方から定住人口が減っていく」という課題があって、「どうやって定住人口を増やしていくのかを提案して欲しい」と言われていたわけです。しかし学生の時にいきなり丹波に定住することは難しいですよ。もしかしたら皆さんも、それぞれ地域で「大学を卒業したら、俺らの地域に住んでくれよ」という話が出たりしているのではないかと思うのですが、それを言われた時に「いきなり定住は難しいな」と、きつと思うと思うんですよ。当時の研究室仲間とそういう話になったときに、「関わり続けることはできるから、関わる機会をどんどん増やしていこう」と、「関わる回数を増やしていって、住んでいるような、定住しているような事と同じようなことが地域に起きるんじゃないか」ということを考えました。当時は僕も大学を卒業してすぐでしたけども、僕ら含めて若い学生が、丹波での活動に頻繁に関わり続けると、大学を卒業した後もずっと関わり続けることができるんじゃないか。それがいわば新しい『故郷作り』です。

実は、昨日も関西大学で佐治スタジオ開設10周年の活動報告のフォーラムをしていて、今パソコンを操作している植地君に報告してもらったのですが、その時に、『故郷作り』って何となく過去のものというイメージがありますけども、僕らのやっている『故郷作り』は、未来をつくることなのだっていうことを皆と議論しました。まさにそのとおりだと思っていて、未来に向けた新しい『故郷作り』を皆で取り組んでいこうとしています。関西大学佐治スタジオは、(僕が)建築学科を卒業していますので、建物として空き家リノベーションといったことをクローズアップされがちなのですが、実際やろうとしているテーマはこの2つです。これは10年前からずっとぶれずに一貫しています。

僕の自己紹介はあまりどうでもいいのですが、2006年に関西大学建築学科を卒業して、育った奈良県からこっちに来ていますので、今で言ってしまうと、移住者になっています。全然そんなつもりはないのですが。大学卒業した後ですね、皆さんこれから、もしかしたら就職決まっている方いらっしゃるかもしれませんが、僕は就職をしていません。就職活動は、2週間くらいしました。けど2週間くらいして、「ちょっと違うな」と思い、就職活動を止めました。大学も4年間で出ていません。5年行っています。留年しています。結構、滅茶苦茶です。留年するし、ちゃんと就職せんし、親に「お前は何をやるねん」と言われ、いきなり「丹波に行く」と言い出す。そんな状態でした。滅茶苦茶やっていました。けど今こういうふうなことになるなんて10年前は思っていないです。ここで、こんなことを喋っているなんて思っていないです。けど10年前の学生を卒業した頃は、こういった空き家の再生や、こういう集落の再生、地域再生の取り組みなどをやりたいとずっと思っていました。それを思っていたので、就職できなかったことは僕の中で納得しているのですが。その当時、そういうふうなことができる環境が無かったので、「それだったら自分で作ったらいいんだ」と決心したわけですね。就職せずにそう思ったんです。そんなことが、現在ではこんなことになっているんです。

今、自分でデザイン事務所を立ち上げて、将来的には設計事務所を立ち上げたいと思っています。今は空き家の活用を仕事としてやっているのですが、実際に自分もこの地域で畑付きの空き家を買って自給自足をしながら、地産地消しながら

ら暮らしています。

そもそもなぜ関大がこっちに来ることになったかと言うと、日本建築学会近畿支部主催による設計競技が 2006 年になって、その提案敷地として丹波市が手を上げていただき、それに僕らが応募したのがきっかけなんです。いろんな学生の提案があった中で、僕たちは、『関わり続ける定住』ということ提案しました。それが丹波市長賞をもらったことで、この提案を具体化しようかということになり、動き出したというのがきっかけです。その時に提案したのが、とにかく空き家を使おうということです。関わり続ける定住をするにしても、居場所がないと関われないですよね。今は、関学もスタジオがありますし篠山も駅中ラボがありますし、拠点を設けると定期的に関わる場所ができるようになりますので、そういう場所をまず作ろうというのが提案でした。地域の空き家を、こことは別の空き家ですね、そこを借りて関西大学佐治スタジを開設しました。

最初は来て何もすることが無い訳です。佐治に来て、いろんな人に話を聞こうとしたけれども、まちに人が歩いていない。どうしようかということで、窓を開けて座っていたら誰か通りすぎるかなと、結果的に 1 日誰も喋らず終わるということを最初の頃は繰り返していました。夜になるとこういう感じで飲み会ですね。することないし、夜になればお酒を飲んだり、わいわい花火をしたりとかですね。そして、「うるさいぞ」と近所の人から怒られて、やっと反応があったと喜ぶわけです。怒られて地域の反応を知るというということを繰り返しながら、怒られながら地元へ溶け込むという、なかなか荒いやり方をしています。そういうことが最初ありました。皆さんも心当たりありますか。

そんなことをして、関西大学が丹波市と連携協定を結んで具体的に活動をもっともっと展開していこうという話になりました。『関わり続ける定住』をもっともっと広げていこうと、活動が具体化していくわけですが、実際にはいろんな活動が起こっています。

最初の頃は拠点を構えてもまちの人とお話しすることが無いので、佐治スタジオにいろんな方々に集まっていただいて、ワークショップをしようと企画をしました。「僕たち、いろんなこと、こんなこと考えているんです。『関わり続ける定住』という事を考えています」と提案するとですね、地元の方々から、どっちかと言うと「お前らずっとおれるんか」という話がいっぱい出るんですね。「青垣めっちゃ冬寒いぞ」と。「冬になったら雪積もるし道凍るし、どないして来るの」みたいな話が出てきてですね。「大学はすぐ出ていくやろ。仕事がないから若者が出て行くんだし」とか、マイナスの話しか出てこないんですね、その頃。「ああ参ったな」と。そんなつもりじゃないのですが、ワークショップしたらそういう話が一杯出るんです。どうしようもなく、僕らも『関わり続ける定住』をやると言っているので、「分からないけど関わり続けます」と。それで、「冬の寒さも知りますよ。仕事が無いことも体験するよ」と。実際に僕も雪が積もって道路が凍って車を滑らせて事故したこともあります。いろんなことをして。実際に自分も失敗しながらも、地域の方々に絶えず「関わり続ける」を言い続けてスタートしました。なので、拠点を構えてからもいろんな事をやっていますけれども、基本的には「関わり続けて、地域を知ることから始める」このスタンスでやってきました。

今もずっとこのスタンスでいますが、『知ることから始める』それしかできないですよね。専門家でもないのです。そんなことをやって、「答えをすぐに出さずに関わり続けることで地域の皆さんと一緒に考えていましょう」ということを地域の方々に言ってきました。地域の方々も少しずつ理解してくださり、今ではたくさんの方が応援をしてくださって、少しずつ活動が進んでいます。実際に学生たちはそういったことを言いながら、また地域に関わっているいろんなことを知ることを目的に滞在型授業を企画しました。授業を通して地域や農業など、いろんなことを勉強することをやってきました。

こういう農業体験などを通じて、1 週間とか 2 泊 3 日とか長期滞在することを何度も繰り返す講座を企画しました。時には他の町に学生と一緒にあったりとか、青垣町だけ見るのではなく関学スタジオにも行かせていただいて、どんな活動をしているのか交流させてもらったり、実際に柏原の町を歩かせてもらったりそんなことを、やっていました。また、今では地域の祭りにも参加しています。

ちょっとだけ空き家の改修の話をして。これは青垣町佐治の航空写真です。まず学生たちは、空き家リノベーションという授業を組んで、地域にある空き家を実際に改修しようと取り組んでいたわけです。それが本来の活動の軸になって

います。今、皆さんがいるのは、この衣川會館で、この部分です。ここがですね、昔の旧街道筋ですね。宿場町。その街道筋に沿って家が立ち並んでいます。その中で画面右側が佐治スタジオ。衣川會館があって一番左側に本町の家があって、その3軒を改修しました。これは佐治スタジオですね。中に入るとバーカウンターがあって、こんな感じです。これは本町の家です。そこもこれから学生たちと一緒にワークショップしながら改修します。地域の方々や専門家に来てもらって教えてもらったりします。これが今、皆さんがいる衣川會館ですけども、こちらの方も改修をしました。佐治スタジオと本町の家は関西大学がお金を出してくれて改修しました。この衣川會館は関西大学佐治スタジオが関わっていますが、関西大学がお金を出しているのではなくて、丹波市の地方創生の交付金で改修をしていて、その主体は『佐治倶楽部』という空き家活用サークルです。関西大学佐治スタジオの活動が始まった時に地元の方々と一緒に空き家を活用していく取り組み、維持管理していく取り組みをしていかななくてはいけないと考え、空き家を使っていくサークルを立ち上げました。これは月1の佐治倶楽部ミーティングの写真ですけども、皆さんと一緒に「空き家をどうやって活用したら面白いかな」とか、若しくは「どんどん増えていく空き家の維持管理をどうしたらいいかな」とか、「今度こんなことをやったら面白いんじゃないかな」とか、いろんな話をしています。衣川會館もこのグループで市の支援を受けながら改修しています。その改修も工期が3ヶ月と短い中だったんですけども、僕らのテーマとしては空き家を改修することは目的ではなく手段なんです。

改修をしてきれいにすることを「目的」にすると、改修が終わればそこで終わってしまいますよね。実は、改修をすることによって地域の課題が見えてくる。そして、地元の方々と一緒に取り組んで、いろんな課題を共有する。若しくは次の未来、10年後、20年後この空き家、この場所を通じて地域をどういうふうにしていくのかを議論することが重要だと思っているので、そういったこと議論していくツールとしては、空き家の活用というテーマはすごくいいです。

皆さんの中で農業をされている方は、農業が目的ではなくてツールになっていると思うんです。地域の方々といろんな話をするツールになっている。僕たちは建築学科が中心となっていますので、空き家を再生する、建物をデザインすることが地域の方々と協働していくためのツールになっています。

こういう感じでアイデア貯金という空き家活用を考えるワークショップを行いました。一番下の写真ですね。地元の方に集まっていただいて、この町内は上町といいますけども、上町の町内の方であったりとか佐治倶楽部であったりとか、空き家の再生に興味のある方に集まっていただいて、アイデア貯金をします。こんな感じですね。とにかくたくさん「こんなことを、ここでやったら面白いんじゃないか」と、皆で出し合おう。どんなんでもいいから、アイデアを出し合おうと。皆でひたすらアイデアを出し合いました。

衣川會館を改修したら、出し合ったアイデアをここで少しずつ実現していこうと。それでも実現しきれないアイデアもいっぱいあるから、それは佐治のまち中に広げていこうと。それでも、「まだまだいけるんだったらいろんな地域、いろんなところに広げていったら、丹波市はもっともっと面白くなるんじゃないか」と言いながらアイデア貯金をしました。貯金なのでまたいつか使えばいいんです。すぐやらなくてもいいのです。とりあえず貯金する。そういうこととして、皆さんとアイデアを出し合いました。

出てきたアイデアをもとに、実際にこの場所を使ってやってみる。佐治倶楽部のスタンスは、「とりあえずやってみる」です。皆さんもいっしょですね。行動あるのみです。考えていて、これやったら地元の人怒るかなとか、大学から怒られるかなと思うかもしれませんが、とりあえず、やる。やばそうな時はやってみてから、もしアカンかった時は謝る。それでいいと思います。とりあえずやってみて、感想を皆に聞いてみて、見てもらって、面白そうなら皆が乗ってきてくれるし、あかんかったら乗ってこないし。それくらいの気分で、「とりあえずやる」が重要だと思っています。

これは衣川會館の土間でコンサートをやった写真です。先ほどのアイデア貯金をやっている時に出たアイデアの中に、「ここでコンサートやったら面白いんじゃないか」とあったので実現した例です。他にもちょうどオリンピックの時だったので「スポーツバーのように、土間にモニターを置いて皆で観戦したらいいわ」とかですね。いろんな意見が出まして、例えば「セルフカフェ置いたらいいんじゃないか」といってコーヒーマシンを置いてみたり、「本屋みたいなことやってみた

いな」と言って本を置いてみたり、とりあえずいろんなことをやってみて、実験的なことを繰り返しています。そんな中で、何か良さそうなやつは続けていくし、あかんかったやつはいろいろ語り合い、切り替えながらやっていく。そんなことを繰り返しています。

今、丹波市もテレワークを推進していますけれども、将来的には衣川會館をそういう拠点にしていけたらいいなという話もあります。僕らとしては、シェアオフィスとかコワーキングスペースみたいな田舎で仕事を作っていく拠点にできたらいいなっていうことを考えております。

今日、皆さんのいろんな発表が後で聞けるわけですけども、発表後の意見交換の司会進行を僕と植地のほうでします。僕もこうやって活動しながら、10年前どのようなことを思ったかなということで、今日は皆さんに3つのテーマについて考えてもらいたいと思います。いつも僕らの活動テーマになっていることですが、

- ・ 交流する、交流しましょう。
- ・ 共有しよう。
- ・ 協働しよう。

ということで、3つ大事なテーマだと思っています。

今は皆さんいろんな大学が活動されてますけど、僕たちが活動を始めた頃は、全然周りにそういった活動をしている仲間がいませんでした。ですので、何をやるにしても初めてで手探りです。だから逆に言うと、失敗しないと分からなかったんです。共有できるものがなくて、そんな中で、もがきながらやってきたという意識があります。そんな時もっといろんな仲間がいたらな、とずっと思い続けていました。それから10年経って今この環境、状況はすごいことだと思います。大学は違うけれども、同じ志を持ってやっている仲間がこれだけたくさんいます。僕自身もそういう仲間がこうやって丹波地域にいるっていうことは心強いです。そういう人たちが交流し、お互いのノウハウを共有し合い、困った時は助け合う。そういうふうな仲間がいることが、活動を続けていく上ですごく重要ですし、大学卒業した後、凄く皆さんの力になってくると思います。

そういう意味で今回は議論することに重点を置いてこのフォーラムをやろうと提案しましたし、ぜひ皆さん、交流して、共有して、もっと言うならその先に協働ですね。皆さんが大学の枠を超えていろんなところで協働していくための一つのきっかけに今日はなったらいいなという思いでいます。僕の方からの紹介はこれで終わりたいと思います。

ありがとうございました。

関西大学 佐治スタジオ

関わり続けるための住居のカタチ



出町 慎

1982 大阪府八尾市生まれ
奈良県奈良市 出身

2006 関西大学建築学科 卒業
フリーランスとして集落研究
丹波市主催まちづくりコンペ
「関わり続ける定住」を提案

2007 関西大学佐治スタジオを開設
大学と地域の間をコーディネート
空き家リノベーションに奮闘
2008「関西大学佐治スタジオ」
2010「本町の家」

2011 空き家活用サークル
「佐治倶楽部」を設立

2015 デザイン事務所SAJIHAUSを設立

2016 「衣川會館」を改修



2006年9月
そして、丹波へ。
日本建築学会近畿支部設計競技「シナリオ丹波」 丹波市長賞

想いの束

関西大学 建築環境デザイン研究室

関わり続けるという定住のカタチ
 今あるものを活かす
 自分たちの居場所を自分たちで作る
 愛着のある風景、愛着をもてる風景





関西大学・丹波市
まちづくりに関する連携協定の締結



地元の方々との初めてのワークショップ

青垣の冬の寒さを知ってるのか？
すぐに帰るんじゃないか？
仕事がないから若者が出ていく。

僕たちは関わり続けます。
まずは丹波を「知る」ことから始めます。

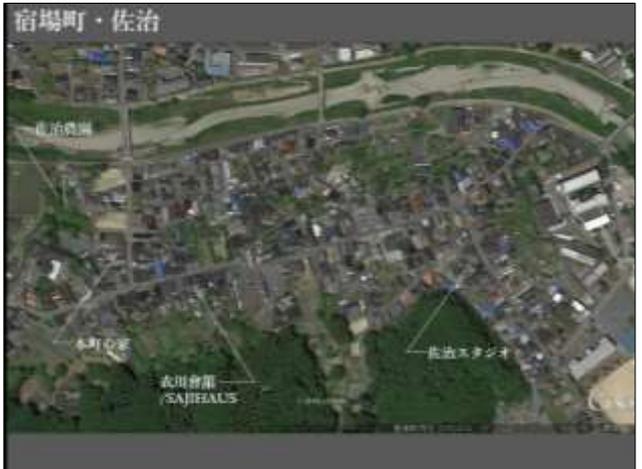
答えをすぐに出さない。
関わり続ける中で考え続ける。



2泊3日丹波に滞在し「地域再生」をテーマに活動



滞在型交流ワークキャンプ



宿場町・佐治



関西大学佐田スタジオ/まちの「劇場」を作る。



関西大学佐田スタジオ/まちの「劇場」を作る。



本町ゲストハウスのまちの「劇場」を作る。



衣川會館



本格的な居場所を作る。
「まちの家」前ターナル「他、まちの家」の活用



地域の調子を再生する。
「まちの家」前ターナルによるまちの再生



アイデア貯金箱のイメージ

他の空き家で…

佐治の
まちなかで…

路地の家で実践

暮らしている
地域で…

AKIYA IDEA BANK

アイデア貯金箱のルール

アイデアを尊重
無責任でいいんです
夢や願望を出し合おう

AKIYA IDEA BANK



交流しよう 共有しよう 協働しよう

AKIYA IDEA BANK

4. 丹波地域で学生活動経験のあるOBのお話

関西大学佐治スタジオ室長 植地 惇

こんにちは。佐治スタジオの植地惇です。

今回は『僕らの活動は未来にどう繋がっているんだろう』というシンプルな（テーマで）、僕も学生時代、皆さんと同じ地域貢献活動の補助金を頂いて活動をしていたということもあって、そういう活動をして、その後どうして丹波で住むことになったかを話していきたいと思っています。

簡単にプロフィールを。僕は三重県出身で、2009年に関西大学の建築学科に入学しました。その当時、僕が入学する2年前からこの関西大学が丹波に入って活動が始まっているので、僕が入学した頃にはそういった活動は始まっているという状態で、僕は丹波に関わっています。その後、2012年に『さじっこ倶楽部』の前の『丹波企画部』というのを立ち上げ活動をしていました。その時に、青垣町の沢野遊園地の改修のプロジェクトがありまして、皆さんと同じ地域貢献活動の補助金を頂きまして、その年の大学連携フォーラムで、今日皆さんが発表するような感じで発表させてもらいました。そこからですね、段々、丹波の活動に頻繁に参加するようになりまして、2015年に大学院を修了した後に、佐治スタジオの研究者になりました。その次の年に佐治スタジオの研究者として、今は佐治スタジオの代表として、やらせてもらっています。

僕たちの活動で大きいコンセプトとして、この二つが活動当初から大きな事かと思っています。大学と関わることで定住人口を増やすのではなく交流人口を増やすそう、『関わり続けるという定住のカタチ』というのと、『21世紀の故郷作り』といって、学生が卒業してからも関われるような仕組みをつくっていかうというこの二つのコンセプトがあったことでいろんな学生が来ていますし、卒業してからも僕のように、ここで活動するようなことができていますかと思っています。

その当時補助金で活動していた沢野遊園地改修プロジェクトについて、少し説明させてもらいますと、佐治スタジオが今この辺で、衣川會館がこの辺なのですが、その近くの沢野自治会の公園の改修のプロジェクトです。この沢野遊園地改修プロジェクトは公園を地元自治体と学生と佐治スタジオが協力して、再生していこうというプロジェクトですね。こういうふうに専門家を呼んで学生と一緒に調査をしたりとか、模型を使って、その自治会の方に、実際に活用の提案をしたりしました。「こういうイメージになったらいいな」ということで、提案させていただいたりしたのですが、実は今、このプロジェクトは動いていなくて、終わった後は動いていないですけどそれでもやっぱり、今回この活動でいろんな人と繋がりができたというのには、意味があったなと思っていますし、このプロジェクトがあったことで僕が丹波に関わりやすくなったのではないかと思います。

その後、どんなプロジェクトに参加していたか等を話していきます。ワークキャンプというのを1回生の時からやっています、その後もTA（Teaching Assistant）をして4回生の時に来たりだとか、丹波の生活、丹波の田舎の暮らしや地域の生業を学ぶという講座を体験していました。それ以外には地域再生滞在型講座といって、木造を学ぶ講座や木造の設計課題をこなす講座があってそういうものに参加しました。その後は、青垣町以外の活動にもいろいろ積極的に参加するようになって、氷上町というところでATACOMという、プロジェクトをやっていました。愛宕祭りに参加して地元の伝統的な奉納物の『造り物』というものを1週間氷上町に泊まり込みながら製作するという合宿をやっていました。ATACOMでは、活動以外にもゴスペルコンサートに参加したりとか、地元の軽トラ市に出店して屋台のコンペだとか、地元の小学校で、甲賀山という地元で親しまれる山があるのですが、そこで秘密基地のプロジェクトなど、を一緒にやったりしました。その後も青垣でも『道の駅の夕べ』というのがありまして、それも今は関西大学の学生と地元の有志とで祭りを作っていくのですが、その祭りでも地元と協力しながら活動しています。

2012年に『さじっこ倶楽部』を立ち上げ、その翌年に『佐治農園』の改修のプロジェクトに、『佐治農園』といって昔改修したところをもう一度活用していこうということをやっています、これも地元の人を呼んで収穫祭をしたり、農家

さんに野菜の触り方を教えてもらいながら、今現在も野菜を育てています。

それ以外もそういう災害復興ワークキャンプといって、豪雨災害のあった市島の方で学生が1週間丹波に滞在しながら、復興の改修をしていくというプロジェクトをやっております。それ以外にも春日町というところで、春日町の地元の団体の方と協力してツリーハウスを作ったりとか、ツリーハウスを作った後も『森の音楽祭』を企画して、そこで演奏会とか、アースバック工法による小屋づくりといって、土嚢を積み上げて小屋を作るというような活動を今もやっています。他にも、地元自治体と連携してやっている『棚田オーナープロジェクト』に参加して、お米を作る体験をさせてもらっています。高校と連携したり、若い世代を巻き込みながら活動をしています。

また、丹波ばかりではなく、丹波で培ってきたノウハウを、京都府八幡市の男山団地というところで、地域と交流できる拠点を作って、そこで『だんだんテラス』というものの開設の手伝いをしています。

これは昨日、大学のシンポジウムで使ったものですが、これが『協働相関図』という名前をつけまして、この出町さんが始められた連携協定というところから、どういう繋がりが増えているかを表わす図で、僕たちの活動は十年間という歴史の中で、これだけいろいろな人が関わっているような活動です。僕は、現代GPが終わった後の『さじっこ倶楽部』というところから、いろいろと活動させてもらっています。

学生時代の地域貢献活動で今の活動に活かされているというのは、様々なプロジェクトで地域との縁ができ、丹波に来やすくなっていたことだと思います。自分のやりたいことができる環境が既にあったというか、佐治スタジオの立ち上げからずっと居るというわけではないですけど、出町さんたちが地元の人たちと立ち上げてくれて、そういう環境がつくられていたというのも良かったと思います。また、学生が地域に関わるきっかけづくりをしていけたらなということで、僕も出町さんたちスタッフの方がいて、丹波に来やすい状況ができていたということもあって、今後そういうことを僕の後輩の学生にもできたらなと思っています。そういった活動が続いていくことで、卒業生が帰って来られる場所がつくれているのではないかなと思っています。

それについて少し話しますが、卒業生でもスタジオに関わってくれていて卒業していった学生の人までもいろいろ関わってくれています。この元佐治スタジオのスタッフの前田さんは結婚して、子供できた後も、丹波でバーベキューしに来てくれたりとか、佐治の製材所で家具を作ったりとかで、いろいろと関わってくれています。こちらはATACOMのプロジェクトで昔キャプテンをした川上さんで、今年のATACOMにも愛宕祭りの『造り物』に来てくれたりしています。これは学生ではないですけど、近くの氷上西高校生の山下君は地元が好きで、盆とか正月には帰ってくると佐治スタジオに寄ってくれたり、佐治スタジオの活動に参加してくれていて、地元の若い子にとっても、そういう大事な場所になっているのではないかなと思っています。さっき少し言った、春日町でのアースバック工法での小屋づくりというのは、この飯坂さんという方が企画から関わってもらって今も一緒にやっています。今月末に忘年会があるのですが、毎年『丹波大望年会』といって、OBの方にも声を掛けて、たくさんのOBの方も参加してくれています。

僕みたいに卒業して丹波に住みながら活動するということは、大分ハードルが高いことなのかなと思っています。そういう関わり方だけではなくて皆にできることは、丹波を思ってまた来てくれるだけでも僕としては嬉しいですし、この貢献活動で補助金をもらっていた意味があるのではないかなと思っています。

重要なことっていうのが、地域に関わり続けるために自分に何ができるのかな、ということを考えることなのではないかなと思っています。僕はたまたま住むという形で丹波に来られたのですが、そういうことは誰にでも気軽にできるというものではないので、単純に地域のことを思いながら暮らしていくということが重要なのではないかなと考えています。

ご清聴ありがとうございました。

僕らの活動は未来にどう 繋がっているんだろう

学生時代の地域貢献活動が
今の私に活かされていること

関西大学佐治スタジオ室長
植地 惇

1988年 佐治スタジオ開設
丹波市、関西大学の連携協定が
締

結
1990年 三重県津市に生まれる
2009年 関西大学入学建築学科に入学
その後、丹波の活動に参加する
2012年 丹波企画部代表代表
沢野遊園プロジェクトに取り組

む
2015年 関西大学院修了
佐治スタジオの研究員になる
2016年 佐治スタジオの研究員を経て室
長になる。



佐治スタジオのコンセプト

関わり続けるという定住のカタチ

関わり続ける中でしか「私にできない」ものがある
長い時間をかけながら「地域の再生」を考え続ける

21世紀の故郷作り

豊かな山河に囲まれた美しい故郷を持つことができる
将来にわたり訪れ、暮らすことのできる故郷のような場所



関わり続けるという定住のカタチ

関わり続ける中でしか「私にできない」ものがある
長い時間をかけながら「地域の再生」を考え続ける

21世紀 僕が丹波に来た時にはこのコンセプト
がありました。

そして2012年に丹波企画部の代表になり、
様々なプロジェクトに関わりました。

丹波企画部—2012年4月結成

丹波企画部とは

昔、まちづくりコンペで優秀な賞を納めたことをきっかけに、
現代GPという文部科学省の支援を受け丹波に佐治スタジオを置き、
関大に研究員が主体の千原山スタジオを置き研究員による
地域交流をテーマにいろいろな授業をしていました。
しかし、今年度から現代GPの支援がなくなり、学生を主体としての運営になりました。
そこで、千原山スタジオを学生主体の丹波学生企画部にするので、
学生ならではの気づき、提案をするために作られました。

主な活動

丹波の地域交流WS

年間の地域交流WS（毎月1回）の運営、企画
ワークショップの補助
地域再生講座などの告知、ポスター作成
青森の祭りへの参加

丹波企画部 丹波企画部代表

沢野遊園地改修プロジェクト



丹波企画部 丹波企画部代表

沢野遺跡地産物プロジェクトとは、
昨年よりはじめたプロジェクトで沢野遺跡地を
再生しようというプロジェクトです。

主な目的

- ・(西)環境の少なくなっているグラウンド、児童公園の整備
- ・将来的に運営管理するための仕組みづくり
- ・沢野地域の抱える課題、地域の将来像と連動した計画案の作成
- ・区民や市民やボランティア等、河川敷散歩道など周辺環境との連動を考える
- ・将来的な展望として、川原としての位置づけ、空き家活用との連動などを考える

作成：佐藤 丹波遺跡地プロジェクト発表

ワークショップ

ランドスケープデザイナーの村上さんの説明
行ったり、あそび場づくり




作成：佐藤 今年の活動

ワークショップ③ プレゼン



2012年4月11日に私たちと自治会の方が協議を行い、自治会の了解を得ました。

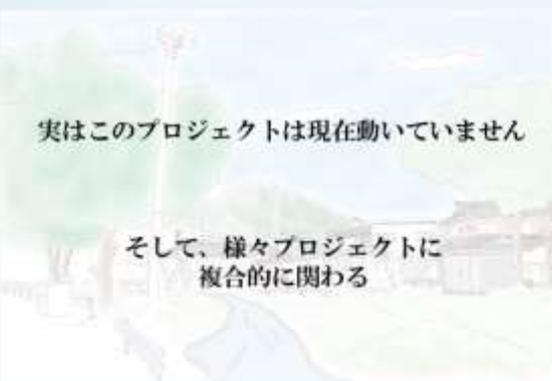
作成：佐藤 今年の活動



沢野遺跡地 再生イメージ

実はこのプロジェクトは現在動いていません

そして、様々なプロジェクトに
複合的に関わる



作成：佐藤 再生イメージ

現代GP期「滞在型交流ワークキャンプ」

兵庫県丹波市を舞台に、「**農山村集落の地域再生を考える**」
をテーマに1週間の現地滞在型インターンシップ講座を開講。
丹波の「田舎暮らし」と「地域の生業」を体験しましょう！



現代GP期「地域再生滞在型講座」

兵庫県丹波市を舞台に、**農山村集落の地域再生**をテーマに環境都市工学部教員が夏季休暇時に2泊3日の現地滞在型講座を実施しています。

青垣町佐治にある空き家を再生した、関西大学佐治スタジオに滞在しながら授業に取り組みます。



ATACOM-地域の祭りに関わること-

ATACOM1



ATACOM1

中実小学校
「甲賀山祕密基地プロジェクト」

あおぎ道の駅のタベ-失われる祭りを守る-

子どもたちのためのお祭りを参加型の仕組みで継続させていく。

補助金に頼るのではなく自分たちの手の届く範囲でお祭りを作り上げていく

地域再生講座のノウハウを生かした「木造建築基礎講座」

さじっこ倶楽部-佐治農園Re活用プロジェクト-

2009年に一度整備されたこの場所の休耕地の活用を再考する

収穫祭の様子

地元農家さんと連携

町を越えての活動の展開 (市島町) 災害復興ワークキャンプ

滞在型交流ワークキャンプのノウハウを生かして

町を越えての活動の展開 (春日町) ツリーハウスプロジェクト

第二回実践型ワークキャンプ

森の住居を再現

アースバック工法による小屋づくり

自治会主体の事業への参加「棚田オーナープロジェクト」

地域交流ワークショップの発展版

様々な活動に地元の若い世代が関わる

教育推進部 林本ゼミ 「交渉学ワークショップ」

八宿祭にてまちづくり部「タンたん」の小物販売

あおぎ道の駅のタベにて「ちびっこ広場」を企画

ATACOMにて手作り物制作に参加

ノウハウの共有①「だんだんテラス」

団地と丹波が繋がる

八幡市山岡団地「だんだんテラス」開設

お片づけマーケットに出店

プロジェクトを通して様々な協働が生まれている。



学生時代の地域貢献活動が 今の私に活かされていること

- ・ 様々なプロジェクトで地域との縁ができた
- ・ 自分のやりたいことができる環境
- ・ 学生が地域に関わるきっかけ作り
- ・ 卒業生が帰ってこられる場所をつくる



4. 丹波地域で学生生活経験のあるOBのお話

神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ 研究員 衛藤 彬史

お世話になります。先ほど紹介がありました衛藤と申します。冒頭に篠山市の赤松課長からご紹介していただいた、神戸大学・篠山市農村イノベーションラボというのが10月、JR篠山駅内に新たにできました。研究、教育、雇用の拠点ということでできており、僕は今そこに駐在しております。立ち寄る機会がありましたら、お声掛けいただければと思います。

今日は『学生時代の地域貢献活動が今の私に活かされていること』について報告してくださいということで、テーマをもらっております。そもそも(私は)どういう人なの、っていうのが必要かと思って自己紹介をまずさせてもらい、そこからどういったかたちで篠山に関わっていった、その中でどんなことをやって、今は何が活きている、ということをお話させていただきますと思います。

生まれは関西ではなく東京です。引越しが多くて埼玉であったり横浜であったりと、ずっと引越しをしていて、大学で京都に来ました。研究室は農学だったのですが、どちらかというと村づくりだとか地域活性化、すごくざくつとしていますが、農村情報化みたいなことをテーマで調査、研究してきました。それでやっていたのですが、全然、農村に住んでもないし、農業をやっていた家でもないし実感が持てなくて、全然研究ができませんでした。「だったら住んだろ」というのがあって、ここ(丹波市青垣町)よりも少し北の養父市という雪深いところに地域おこし協力隊という形で、1年半家を借りて、大学院の博士課程に行きながら、週に1回か2回、京都と養父を3時間くらい車で رفتり来たりするようなこと、ずっとやっていました。そんなことをして、ありがたいことに研究をしつつ、実践をしつつ、学生が篠山に来るときの授業のお手伝いをしつつ、というのができるよ、ということでお声掛けをいただいて、このような職業をしています。

その間に今の流れには出てこないのですが、時期的には、篠山市の草山地区桑原集落というところにお世話になっていました。篠山市の中でも大分京都寄りなので、同じ丹波地域と言ってもここ(丹波市青垣町)からは距離があるのですが、そこで、ずっと地域活動をやっていました。

では、どんなことをやったのというところが今日の主題になるのですが、学部3年生の授業で『農村計画学演習』という授業があります。大学で地域に入って何かするという授業ですけど、一番初めは学部3年生の時、授業を取っている状態で地域の課題について考えましょうか、みたいなワークショップがあってそれに参加します。その時は、「ああこんな感じなんだなあ」と終わって、今度はスタッフとして、計画学演習を手伝うこととなります。大学4年生の時ですけど、「そのファシリテーターをしろ」みたいなことを当然のように教授から言われるんです。「やったことないんですけど」と言うと、「やっているうちにできるから」と。そのくらいの感じで皆、授業に入った途端にファシリテーターというものが何なのかも分からないうちに。乱暴ですけど、そういうことをやっていました。

「ファシリテーターって何やろう」と同級と一緒に話しながらやっていた僕は大学院に進むので、ここからそのぎゅっとなっているのはずっと同じなんです。計画学演習という授業で桑原地域に行くと、学生が地域の人たちから話を聞きながらワークショップをするという活動のファシリテーターをずっとやっているんです。毎年やっていると分かるようになってくるのですが、同じなんですよ。授業としては、それでいいんです。「課題を考えましょう」それで、「こんなことができるじゃないですか」と提案をして、それを特に何もせずガチャンと崩して、次の年同じように積むという。この積む経験はできるので学生としては面白いのですが、スタッフや地域の方は、「これ、どうなんや」みたいな気持ちになってきて、「何も発展がないな」というのは言っていました。「それならもう少し踏み込んだ形で何かしたいね」というところから、2014年に学生団体という形で研究室のメンバーを中心に立ち上げて、「もう少し深く入れることをしようよ」ということで、活動していったというのが経緯です。

内容を書いてはいるのですが、大したことはやっていないです。最初に言うのを忘れていたのですが、僕も昨年は学生席で今年度こんな活動をしましたとって、活動報告をしていたんですね。なので、フォーラムの準備の方というよりは、学生側の方として発表する側でしたので感覚的には多分、学生に近いのかなと思っています。「学生気分です仕事やられていたら困る」と助手に言われ「すみません」と言いながら、やっているのですが、その中でやっていたのは、お祭りの時の映像を撮影してそれを編集して記録することやっていました。

「良かったな」と思ったのが、公民館にかなり古いVHSテープが残っているのですが、全然再生ができなくてガサガサのやつでした。それをDVDに焼き変えて見られるようにしました。それで何が良かったかという、見られるようにした、例えば25年前の夏祭りの様子を今、実際に夏祭りを運営している方とお酒飲みながら画面にパッとだすと「うわー」と言って、その時代に居た人とか今居る若い方が出てきて盛り上がり、「この頃はああやった、こうやった」と言いながら結構盛り上がったので、「こういう使い方もあるんだな」と。ただ単純に保存しているのではなく、皆で見たら面白いんだってというのがあって、「やって良かったな」と思いました。

次の年ですが、少し変えて「食べ物をしたいね」みたいな話をされていて、篠山は食べ物がすごく豊かなので「これをやっておきたいな」という感じのことを言っていました。地域で『愛桜会』といって昔から葉っぱを採ったりだとか、その辺の野草を採って春に天ぷらにするのですが、滅茶苦茶美味しくて、「これで何かできないかな」と言って。その天ぷらにする前の写真を撮って紹介する冊子を作ろうと言っていたのですが、頓挫しています。しっかりきれいに写真を撮って「こんな冊子を作ろう」と言いながら、2015年はいろいろあって頓挫しています。

食文化の聞き書きというので、地域の86歳とか90歳の方に戦前、戦中、戦後の食文化を、今ちょうどメモを配っていただいています。それを「聞き書きをしよう」と言っていたんです。最初は、その辺から遡っていったら、地域の伝統食とか郷土料理にこんなものがあつたのかと、どんどん出てくるのではないかなと思っていたんです。が、案外無いんです。すごく美味しいものはいっぱい有るのですが、ずっと昔から「これがこの地域だけのもの」と言われていても「他所の地域でも作っているからね」という話になって「あ、そうなんや」くらいの感じで。聞いていたら「忘れてはいけないな」と言う話が実際に聞けて。今配布したメモに書いているようなことは昨日の晩、準備で読み返していてもその状況を思い出して、「そうやんな」と思うようなこともあつたりして。単純にやっていること自体が面白かったんです。そのようなお話を聞かせてもらって、すごく面白かったというのがありました。

これを踏まえて今に活かされていることで、僕は今そうやって篠山で仕事させてもらっていて、(学生時代と)近いことをずっとやっているの、「何でも活かされている」と言えば活かされているのですが、そういう進路をとる人は少ないのではないかと思います。ではもう少し一般的にというか、もう少し「活かされているな」と言えることは何だろうかと思っているときに、この3つの円の心構えと言うところを考えてみました。

これは何かというと、自分たちが『できること』、自分たちが『やりたいこと』、それから地域だったり行政だったりから『求められること』が3つの円。「これは仕事でもそうだ」と言われたのですが、これが重なる部分でやるのが一番うまくいくというか、上手に回るといような話で、これらを意識してやっていました。自分達にできて、「これがしたい」ということでかつ「それやって」と言われそうところを探りながらやっていました。多分、活動を続けていくにつれて「今度、君らこんなこともできるんやったら、これもやってよ」、というところが出てくると思うんですね。そうすると、CanとMustのこのところ。できることや仕事のやれているところに活動が展開していきがちだと思うのですが、「それはどうなんだろう」と思っていて、できるし、求められているし、やったらいいのですが、別にやりたくないんですね。大学生は自由というか、夢中になれることに目一杯時間を使える時間かなと、思っていて、それこそバイトだっているんなバイトをいっぱいやれるし、バックパッカーで海外に1ヶ月、2ヶ月まとめてポーンと行くことができるじゃないですか。大学を卒業するとそんなことは結構できなくなってくるので、何でも夢中になれることをやって欲しい。というのが、僕の経験からもあって、やりたいことを大事にして欲しいなってすごく思うんです。

僕も「やりたいことをやる」ということを中心に考えていたので、皆さんもそうかもしれないのですが、傾向的に、『で

きること』と『求められていること』をやっているうちに、しんどくなってくるという気がしたので、今はわざわざこういうことを言っています。では、単純に「やりたいことだけずっとやっている」だけなら、地域から「何でそんなことやっているの」となるし。というところで、今で言うと、『やりたいこと』と『できること』の接点を求めさせるというか、「僕らこんなことしたい」、「こんなことをやったら、こんな意味あるでしょ」、「できますよ。どうぞ」、みたいな話をした時「それやったらやってよ」、と地域に言わせられれば、もう円の真ん中ですね。「やりたい」を優先してかつ、「できます」の上で求めてくれるのかな、というところを探っていくっていう方向の方が、「やってよ」、「できますよ」でやるよりも、活動としては面白く展開するのではないかな、というのを僕は感覚的に自分がやっていた中で思っています。

今、神戸大学の職員の立場で逆に学生が篠山に来て何か活動をする時に、ある種（地域との）調整をしたりするんですね。そうしたら求められることは、地域は今こういうことやって欲しいって思っている。例えば、この間「3月に小学校が閉校になったから、そこの活用を考えて欲しい」というのがあったり。市はこういう施策をやっているからそこに大学生の視点、若者の視点を入れてこういう活動をやってほしい。県はこう思っている。もちろん、あるんです。求められることがたくさんあることは分かっていますが、それを「学生にやってください」では、それができることで、やりたいことなら面白いことだと思うのですが、やりたいことではなかったら、多分どこかで無理が来ると思うんです。そうではなく、求められることが分かりながら「学生、多分これができるな」といったことを定めつつ、これはやりたそうだとすることを引っ張りながら、真ん中のところを調整する。それが今、僕が取り組みたいと思っている内容です。

自分がそう思っているから、そういう活動を応援できるような関わり方っていうのをしたいというようなところに、今活かされているかな。これは、この活動の先に必ず無くても、自分が仕事しても多分同じことなのかな。僕はやりたいことを大事にしたいというのがあったので、そういう心構えでやっていたということを、今に活かされていることとしてお話しさせてもらいました。以上です。

ご清聴ありがとうございました。

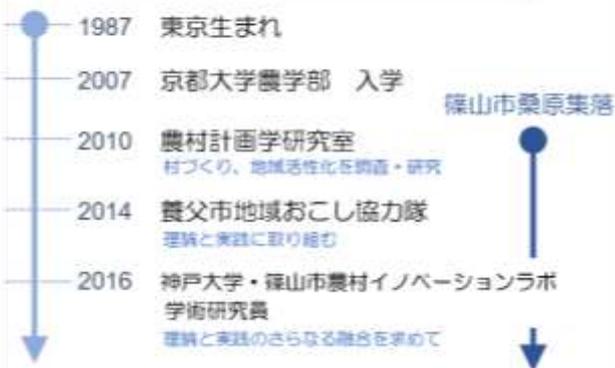
学生時代の地域貢献活動が 今の私に活かされていること

神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ 学術研究員
一衛藤彬史の場合

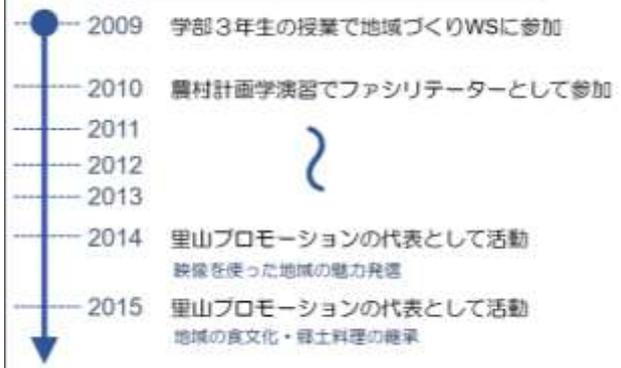
発表の流れ

- ・自己紹介
- ・活動経緯
- ・活動報告
 1. 映像づくりを通じた地域文化の再発見
 2. デジタルアーカイブ
 3. 地域の食を伝える～野草の天ぷら
 4. 食文化の聞き書き
- ・今に活かされていること

自己紹介



活動経緯



2014年度

映像を使った地域の魅力発信

映像づくりを通じた地域文化の再発見

桑原地域での祭りや炭焼きなどの活動に参加し
映像を記録してDVDにまとめた

デジタルアーカイブ

老朽化やカビのため見られなくなっていた、約25年前（1990年）の地域でのお祭り、子供会、消防団などのVHS映像をデジタル化



2015年度

地域の食文化・郷土料理の継承

地域の食を伝える～野草の天ぷら

愛桜会による野草の天ぷら会に参加し記録

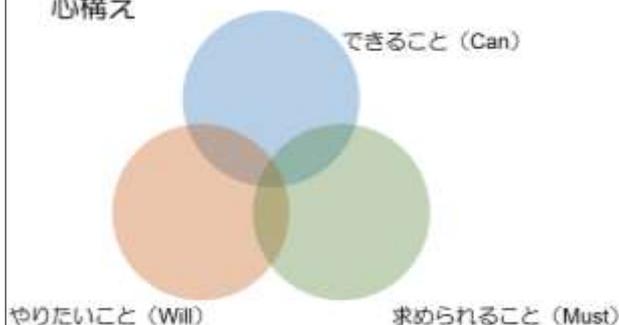


食文化の聞き書き

戦前・戦中・戦後の食文化について聞き書き

今に活かされていること

心構え



5. 学生からの地域貢献活動報告

(1) サンセット 12

神戸大学3回生の杉田です。サンセット12の発表をさせていただきます。

サンセット12は篠山市の日置地区という地区で活動させてもらっています。『日』、『置』なので、英語でSunとSetでサンセットと付けさせてもらっています。概要としては、『実践農学入門』という大学での授業で、日置に1年間農家さんのところにお手伝いさせてもらいました。その時に地域の祭りに参加させてもらって、その祭りに「また来たい」というふうに集まって団体ができました。この写真のとおり、サンセット12、実は13人いますが12です。

動機はこの祭りが楽しくて魅力的であること、農家さんとか地域の子供たちと一緒にワイワイ遊んで、神輿を担いだりとか、こういうことと、神輿のところにはお酒がついてくるので、お酒を飲んで皆で騒ぐことが楽しいから参加しています。

活動記録でこれは8月の祭りなのですが、波々伯部神社大祭で、こちらは山車ですね。神輿に車輪がついていて皆で押すという形です。これは3年連続で活動しているので地域の人とも顔見知りになって、「おお、また来たんか」といつて遊んだりしゃべったり。もう一つが、磯宮八幡神社祭礼で、こちらは神輿を本当に担ぐほうです。あとは城東味祭りというのが、篠山味祭りが篠山城であるんですけども、その次の週に似たように枝豆売ったり黒豆納豆を売ったりする祭りです。これもお手伝い、売り子などさせてもらいました。

活動の効果ですが、日置地区の現状として日置地区というわけではないんですが、その近くの地区で同じ祭りに参加しているが限界集落になっている地区とかもあって、担ぎ手が減少している。それに対して学生が来て、若者が来ることによって、若者が祭りの担ぎ手になって自分たちも一緒に盛り上げて、盛り上げを伝えて、学生が学生に伝えることで、人が増えて地域を活性化させよう。

今年から祭りだけではなくて新たな取り組みとして、まず、先ほどの『実践農学入門』の次のプログラムで『実践農学』という授業があります。それで、都市農村交流の場づくりで空き店舗を利用した地域の人向けの交流スペース、コミュニケーションスペースみたいな感じで誰でもふらっと立ち寄れて、コーヒーとかを飲めるというスペースを考えて計画をしています。それは授業なので、決まった時間しかできないんですね。その授業と地域の人とつなぐ役割とか、授業時間外での活動サポートとかに、このサークルを使っています。

例えばこの授業外ですけども、その地域の建物の新しくペンキを塗り替える時に学生がサポートをする、というのをやっています。その時の活動が新聞にも紹介されています。これが塗り終わった写真で、これはまだ外装は付け加える予定ですけど、下地としてはこういう感じです。学生のコミュニケーションスペースに集まって欲しいと思っているので、12月の17日、18日夜と昼に、クリスマス交流会というのをやります。それで、大人の人には夜に集まってもらって一緒にお酒を飲んだりとか、18日の昼には子供たちと一緒にクリスマス会を開こうと思っています。

もう一つ、日置地区には黒豆納豆というがありまして、これは僕らの少し前なのですが、神戸大学篠山フィールドステーションとまちづくり協議会が共同開発した黒豆を、甘納豆ではなく粘り気のある納豆菌の納豆なのですが、そういう商品を開発しました。これが名産品になっているのですが、今はまだあまり広まっていないようなので、それもちょっとお手伝いできたらなと思ってこういう活動しています。

『実践農学』はいろいろなプロジェクトに分かれているんですが、そのうちの一つに市役所と共同してふるさと納税を考えるとというプロジェクトがあります。それを聞き「黒豆納豆を紹介させてよ」と共同でやったので礼品に追加される予定です。

それともう一つは、篠山で活動している神戸大学生が集まって、自分たちの入っている地域の名産品や特産品を集めて、それを『ささやまや』という居酒屋を、六甲の居酒屋をお借りして1日開いたんですね、その時に黒豆納豆を使わせて

もらいました。

今後の展望ですが、学生団体としての活動は今年で終了です。来年以降は個人の集まり。ちょっと微妙にこの辺の表現が難しいですが、祭りに行くという活動は今後も続けていきます。それに伴って、コミュニケーションスペースに遊びに行くというのも個人ではありません。(地域と)全く縁が切れる訳ではないのですが、学生団体としてこういうふうの人に発表したり、ということはやめて、親戚付き合いみたいな形で遊びに行こうというかたちに決まりました。

ご清聴ありがとうございます。

祭りを通じた日置の活性化



サンセット12 概要

2014年度の神戸大学の通年講義である実践農学入門で日置の活動に参加し、お祭りで仲良くなったメンバーが、「またお祭りに参加したい!!」と集まって出来た団体。



日置で活動する12人
=サンセット12

動機

メンバーに共通する想いは
お祭りが**楽しく魅力的**であること。

地元の人と仲良くなった
久々に無心になってはしゃげた
枝豆とお酒がおいしかった



2016年度 活動記録

2016年度 波々伯部神社大祭

新たに神戸大学から参加者を募り、集落ごとに分かれて男女そろって神輿を担ぎ祭りを盛り上げました。

3年連続の参加だったこともあり、より日置地区の方々とは仲良くなり、深く交流することができました。



2016年度 磯宮八幡神社祭礼

波々伯部神社大祭につづきさらに祭りの参加者を大学内で募集し、18名で参加しました。

子供たちと一緒に神輿を押ししたり、現地の若者との交流もあり、大変盛り上がりました。夜は、地元の方々の宴会にも参加させていただきました。

また城東味祭りのお手伝いもさせていただきました。



篠山・日置地区への効果

○日置地区の現状

過疎化・高齢化が進む

中には12世帯しかない限界集落も・・・

お祭りも担ぎ手の減少により年々存続の危機へ

担ぎ手不足の祭りに参加&人を呼ぶ

→若者が来ることによる地区の活性化

→お祭りという大切な文化的財産の維持

新たな取り組み①

神戸大学で今年度、3回生を対象に開講されている実践農学のプログラムの一つ

都市農村交流の場づくり

@日置地区

日置地区と都市に住む若者との結節点となる場を日置地区で形成する取り組みを行っています。

現在は空き店舗を利用した地域の人向けの交流スペース作りに取り組んでいます。

10月に行った外壁のペンキ塗りの様子が丹波新聞に掲載されました。



地域の人に愛される

交流スペース

の完成を目指しております。



12月17.18日にはイベントも開催予定です！

新たな取り組み②

神戸大学と共同開発した日置の名産品
KOBEKURO黒豆納豆の普及

—KOBEKUROとは？

神戸大学篠山フィールドステーションと、日置地区まちづくり協議会の共同開発による商品。

1、実戦農学の別班と共同し、ふるさと納税の礼品に追加

2、六甲で学生が開いた一日居酒屋“ささやま屋”にて販売(小鉢・土産)



今後の展望

学生団体としての活動は今年で終了

来年度以降は、ただの個人の集まりとして日置の祭に遊びに行く

ご清聴ありがとうございました



(2) 学生団体 Clown

これから学生団体 **Clown** のプレゼンを始めさせてもらいたいと思います。今回で 3 回目の丹波地域大学連携フォーラムの参加なので、一度聞いたことがある方もいらっしゃると思うのですが、今回初めて参加されている方もいると思うので、僕たちの活動について最初から説明させていただきたいと思います。

私たちは今、**Clown** という名前で活動しているのですが、以前は **TMP** という、**Tamba Manufacture Project** という名前で活動していました。まず、なぜこの団体ができたのかを説明します。

目的は大きく 3 つあって、まず、私たちは普段大学で授業を受けていることが多いのですが、この私たちが外の現場で実際に作業ができるというのは貴重で、その体験を通してさらにいろんなことを知りたいと思いました。2 つ目はツリーハウスをつくるにあたって、現場の方や工務店、材木店など様々な方に助けていただいています。その方々と連絡を取ることで、社会に出る上で必要なスキルを身につけることができると考えました。最後に、大学生である今の私たちに何ができるかということ考えた時に、私たちが地域の方々と繋がって地域活性化に貢献できたらいいと考えました。このような理由で **TMP** という団体が始まりました。

次に、なぜ丹波を選んだかという理由を説明します。自然が多いということと、若者を呼び込む活動をしているということは、大学で建築を学んでいる私たちにとってとても良い条件だと考えました。さらに木材が余っているという問題があるということで、ツリーハウス作りを通して少しでも、この問題が解決できるきっかけになるといいと考えました。このような理由で丹波というこの場所でツリーハウスを通してつながりを作りたいと思い活動を始めました。丹波で活動することで私たちはたくさんの繋がりを持つことができました。そこで、丹波をはじめ他のいろんな地域でもつながりを増やしたいと考えたので、2014 年 12 月に **TMP** から **Clown** という名前に変えて、更に活動範囲を広げた活動を行っています。

私たちは計 108 名で活動しています。代表、副代表、会計の 3 役を軸とし、営業部、設計部、渉外企画部、広報部の 4 つの部署が支えます。四つの部署が協力しながら、それぞれの部署が役割を果たし、地域の人々と繋がることでツリーハウスが誕生します。私たちが掲げる理念は、『ツリーハウスから始まるつながりの輪』ということで、3 つのポイントを掲げています。『森と人のつながり』について、子供たちにとって自然と触れ合う機会が昔と比べて減っている今、ツリーハウスを通して自然の面白さ、魅力を体感、伝えることで人と自然とをつなげます。『ツリーハウスと人のつながり』について、私たちは、ツリーハウスを作るにあたって、工務店の方々と地域の方々とつながりが生まれます。『ツリーハウスとツリーハウスのつながり』について、ツリーハウス同士がつながることでその地域同士のつながりが誕生します。

次に、**Clown** の活動の流れを紹介します。設計部が提案した案を設計講評会へ持って行き、案を決定します。地域の方々、工務店の方々の協力のもと、約 2 週間の合宿でツリーハウスを製作します。完成したツリーハウスをより多くの人に知ってもらうために、ツリーハウスイベントを定期的に行っています。ツリーハウスは安全性の確保のために約 3 年に一度改修を行いますが、7 年後には、解体し、そうすることで、長年にわたって、私たちと地域の関係性が続き新しいツリーハウスも誕生します。

次に、私たち **Clown** の 3 つの地域での活動についてお話します。まず初めに、丹波市での活動についてお話します。2014 年 3 月に悠々の森にて、バーベキューコンロの作製を行いました。9 月には夏休みの長期休暇利用して、1 基目のツリーハウス『いろは、』を完成させました。11 月には、悠々の森にて開催された『風の宴』に参加いたしました。翌年 3 月には、『いろは、』に屋根と階段を設置し、その地域の人たちを呼んで完成イベントを開催しました。8 月には、『**Summer Festival IN 丹波**』を開催しました。今年の 2 月には『いろは、』の竹交換合宿を行いました。

次に、滋賀県米原市の活動について報告します。2015 年 4 月に、米原市うかの冒険遊び場に敷地を決定しました。6 月に地域の人たちを呼び設計講評会を行い、ツリーハウス案を決定し完成前イベントを実施しました。9 月には夏休みの

長期休暇を利用し、2基目となる『あかす』を完成させました。今年の3月には、『あかす』の遊具作製を行い、完成イベントを実施しました。

最後に、京都市花脊での活動を報告します。今年4月に花脊の都市交流の森に敷地を決定しました。5月には地域の人たちを呼び設計講評会を行い、ツリーハウスの設計案が決定しました。7月には、地域主催の『ふるさと森都市フェスティバル』に参加しました。そして、9月にさらに3基目となる『このは』を完成させました。

これからのClownの活動について説明させていただきます。まず、年が変わって2月13日から4日間かけて、丹波市の『いろは、』の屋根が老朽化してきたということで、改修作業を行います。そして3月12日から1週間かけて、今年の夏に作った京都市の『このは』に遊具を設置したいと思っています。この春の大きなイベントとして、今年からの試みですけど、『ツリーハウスの日』イベントというものを開催します。これはClownで『みんなのツリーハウス』ということで、3月28日を『ツリーハウスの日』にして、3月28日が火曜日だったということもあって地域の人々の集まりやすい土曜日の3月25日にイベント開催します。このイベントでは3箇所のツリーハウスで同時にイベントをすることで、ツリーハウスとツリーハウスがつながって、地域の人たちをこのイベントに呼ぶことで、ツリーハウスと地域の人々がつながれるイベントにしたいと思っています。今、団体全体としてこの日に向けてイベントやその他の活動について考えていることとしては、テレビ中継などをして、3箇所で意識を統一して、ツリーハウスとツリーハウスがつながれるような催し物をできればと考えています。

長くなりましたが、これで学生団体Clownの活動報告とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

丹波地域大学連携フォーラム2016

学生団体Clown



前団体 TMP
Tamba Manufacture Project

理念 ものづくりを通してつなげる地域のコミュニティー

目的

- ・授業とは違い実際の現場で体験
↳ 社会勉強になる
- ・クライアント、現場の方などとコミュニケーションをとる
↳ 社会に出ていくうえで必要な力
- ・地域活性化につながる
↳ 若い世代が訪れることで街が賑わう




前団体 TMP
なぜ丹波か、

- ・丹波は自然が多く、農地が多い
若者が少なく、町全体で若者を呼び込む活動を行っている
↳ 活動の場所としての絶対条件
- ・木材が多く余っている
↳ 木材問題を解決するきっかけ

街をどんどん活性化していこうと考えている

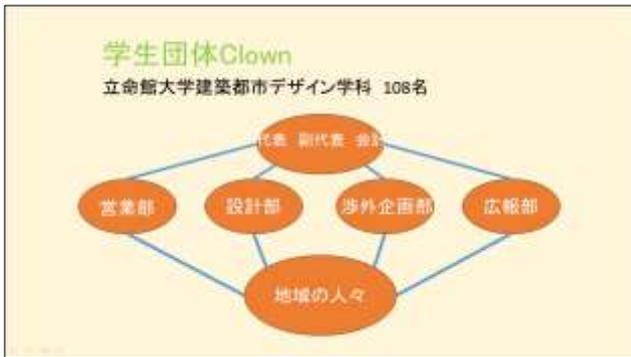


TMPからClownへ

2014年12月 TMPからClownへ！

TMP 丹波のみの活動	活動できることが限られてくる 繋がれる人の数にも限界がある
↓	↓
Clown 全国での活動	活動の幅が無敵大に広がる つながりの輪に限界がない

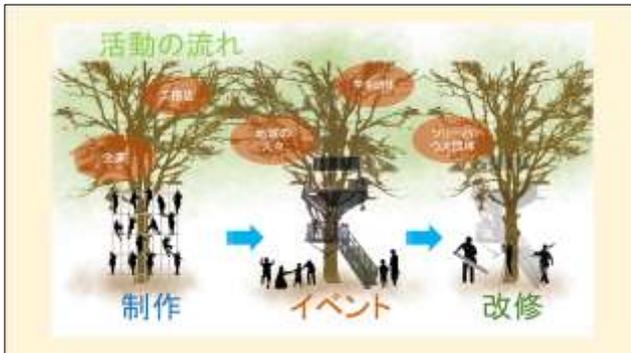
もったいないのは？



理念

「ツリーハウスから始まるつながりの輪」

森×人	ツリーハウス×人	ツリーハウス×ツリーハウス
<ul style="list-style-type: none"> ・自然の魅力を知ってもらう ・その土地の問題を認知してもらう し丹波の竹葉問題など ・自然の保全意識への展開のきっかけを作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・工務店や指導者の方と繋がる ・実際に道具を使うことができる ・子供たちに自然と触れ合える機会を与える ・ものづくりの大切さを知ってもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ・ツリーハウスのつながりで地域どうしが刺激しあえる ↳ツリーハウスツアーイベントなど ・ツリーハウスで地域を同士をつなぐ ↳ツリーハウスブック



兵庫県丹波市での活動

2014. 3月	キャンプ場 悠遊の森にて880ピロの作成	
9月	キャンプ場 悠遊の森にてツリーハウス「いらは」の作成	
11月	キャンプ場 悠遊の森にて行われど風の宴に参加	
2015. 3月	ツリーハウス「いらは」に屋根、階段の設置	
	完成イベントの開催	
8月	Summer Festival IN 丹波 を開催	
2016. 2月	ツリーハウス「いらは」の竹交換	

滋賀県米原市での活動

2015. 4月	敷地が滋賀県米原市「うかの冒險遊び場」に決定	
6月	設計検討会を行う	
7月	ツリーハウス設計案の決定	
8月	ツリーハウス完成前イベントを開催	
9月	ツリーハウス「灯果(あかす)」の完成	
2016. 3月	「あかす」の道具作成	
4月	「あかす」道具完成イベント	

京都府京都市花脊での活動

2015. 4月	敷地が京都府京都市花脊「山村都市交流の森」に決定！	
5月	設計検討会を行う	
7月	ツリーハウス設計案の決定	
	現地主催の「ふるさと京都市フェスティバル」に参加	
9月	ツリーハウス「光の葉(このは)」の完成！	

これからのClown

2017. 2/13	～	いらはの改修
2017. 3/12	～	このはに道具設置
2017. 3/25		「ツリーハウスの日」イベント開催！！



(3) ミライの輪

今から神戸親和女子大学、甲南女子大学からミライの輪のプレゼンテーションを始めたいと思います。よろしくお願いします。

まず、ミライの輪の説明をしたいと思います。久下地域で参加している学生の人数が10名で、神戸親和女子大学、甲南女子大学の他に、(久下地域以外では)甲南大学と神戸学院大学の学生も活動しています。活動区域は丹波市山南町久下を始めとする5つの団体に今年は入らせていただいております。

神戸親和女子大学がゼミで取り組んでいることについてですが、私たちは『創造的イノベーション＝デザイン思考×システム思考』というテーマで地域活性化と地域ブランド化に取り組んでいるのですが、デザイン思考というのはデザイナーのように実際に現地を訪れて、話を聞いて共感から課題を見つけるということで、システム思考はその共感から見つけた課題を、課題に対していろいろなアイデアを出して、そのアイデアを組み合わせることで1つの形にするということです。この図はデザイン思考のステップというもので、1番から5番のステップを踏んで私たちは地域活性化や地域ブランド化の課題解決などを行っています。

甲南女子大学佐伯ゼミでは先ほども説明があったのですが、SNSなどのデジタルメディアを活用して、企業や地域の問題解決プロジェクトに参加し、理論を重視するシステム思考と、感性も動員するデザイン思考の両方を融合して物事を捉えることで、イノベーションを起こすための条件を学んでおります。またプロジェクトに参加することで個人が持つ様々なリーダーシップを発揮することを目的としています。活動内容は地域ブランド化、ビジネス創出、活性化、ブランド創造などをしていて、主にフィールドワークやイベント企画、インタビュー、ミーティング活動を行っています。

次に、12月までの活動内容をご報告させていただきます。全体の活動としましてはこのようになっております。まず6月に三宮にて顔合わせミーティングを行いました。久下地区では年々人口が減少し、若者が都会に出て行ってしまふことが現状として挙げられます。若者が少なくなると賑わいに欠けてしまうので、私たちは地域を盛り上げるべくイベント企画を提案いたしました。企画の内容としましては、広大な畑が広がる丹波市久下地区では小豆が特産物という点に着目し、7月に小豆植えを開催することに決定しました。小豆の種を植えることから始め、収穫して食べるまでを、学生と地域の方々と協力して行うことで、交流を図ることを目的としました。

次に、Skypeミーティングについてです。まずSkypeとはパソコンを通じてテレビ電話をすることができる無料のソフトです。頻繁に会って話し合いをすることが難しいため、学校の昼休みの時間を利用して、イベントの企画の内容が決まると、活動前にイベントの最終確認をSkypeで行った後、活動に励みます。ここで終わって「さて次の企画」ではなく、活動後のミーティングでフィードバックをしたり、次の企画についての話し合いを行ったりします。1つのイベントに対してこの一連のルーティーンを大切にしております。次の授業との兼ね合いもあり、ミーティングができる時間は限られてきますが、情報を共有できる有効な時間となっております。次は7月に行った小豆植えについてです。左の写真のように20cmの間隔を空けてスコップの手持ち部分を使い穴を空けていきます。1つの穴に2、3粒の小豆の種を植えていきます。種に薬が付いているため、このようにピンク色になっております。また、小豆は育つと花の実ができ、黄色い花が咲き、一つの穴から50粒ほど収穫できます。収穫した小豆は京都の和菓子屋さんに出荷したりするそうです。小豆を植えた後は久下自治会館にて地域の方々にお昼ご飯をごちそういただきました。おにぎり、サラダ、野菜の天ぷらはどれも地元の畑で取れた新鮮なものばかりで格段においしかったです。この日は(連携先の久下自治振興会の)久下さんも交え地域の方々と一緒に小豆の収穫時期や次回の活動の打ち合わせを行いました。

次に、9月に開催した『久下フェスタ』についてです。2日間に渡って行いました。主な実施内容としましては、小学生から年配までの地元の方々と神戸親和女子大学軽音楽部による演奏の舞台パフォーマンスと学生が主催する写真ブース、地元の方々のご協力で気軽に休憩ができるカフェの3点です。学生が主催する写真ブースは『久下フェスタ』での思い出を何か形に残したいという思いから提案いたしました。一番良い笑顔を撮影し、写真をパソコンに転送し、編集し、

印刷します。そしてその日中に写真をお渡しできるように学生が撮影から印刷まで全てを一括して行います。カメラやスタジオセットなどの機材は親和女子大学と甲南女子大学の引率教員からお借りしたものを使用しました。スタジオセットを設置し、一眼レフカメラで撮ることで、写真スタジオで撮影したような本格的な1枚に仕上がるように、ライトの当て方や角度を工夫しました。また、本格的なスタジオセットでの撮影は緊張してしまうので、風船で作ったハートやカラフルなボールを置いて子供たちの興味を引きつけ、自然な笑顔を撮影できるようにも工夫しました。9月17日の『久下フェスタ』の前日準備では、各自で折り紙や画用紙を持ち寄って、会場となる自治会館の飾り付けをしたり、写真スタジオの設置、当日の行動の確認を行いました。こちらが18日の『久下フェスタ』当日の舞台パフォーマンスの様子です。小学生から年配の地域の方々による和太鼓や健康体操、よさこいソーランにダンス、親和女子大学軽音楽部による演奏を披露していただきました。また、舞台パフォーマンスの最後のプログラムでは、学生が進行を努め、ビンゴ大会を行いました。景品ではたくさんのお菓子を用意し、ビンゴになった人から好きなお菓子を選べるルールにすることで、平等さが出るように工夫しました。学生主催の写真ブースも好評で、お友達同士や家族で来てくださり、『久下フェスタ』での思い出をプレゼントすることができました。地域の方々も含めてのフェス後の話し合いでは、『久下フェスタ』が地元久下地区の恒例行事になればいいなあ」と言っていたいただき、また来年につなげることができたように思います。また、『久下フェスタ』に神戸新聞の方がお越しくくださったようで、翌日の神戸新聞に大々的に取り上げていただきました。

次に、小豆観察についてです。①の写真が7月に小豆を植えた時に撮影したもので、②が10月に訪れた時の写真です。約4ヶ月の期間で小豆の葉っぱがあたりを一面埋め尽くすまでに成長していました。親切な地元の方々がお昼ご飯を用意してくださり、地元の新鮮な野菜とお米を堪能しました。久下地区のお米は今まで食べたお米で1番美味しいと胸を張っておすすめできるぐらい絶品です。

次に、11月に行った小豆の収穫ですが、収穫はもう既に済んでおり、小豆の仕分け作業を行いました。さやから小豆を取り出し、黒く欠けてしまった小豆とサイズが小さい小豆と大きい小豆の3つに分ける地道な作業を延々と行い、それと同時に次の活動に向けての話し合いも行いました。その自分たちで植えた小豆を使って、地域の小学生たちを集め、12月に餅つき大会を実施する予定となっております。

次に、これまでの活動を通じて感じたことを述べたいと思います。今回私たちは予定している7月から12月にかけて主にイベントを行ってきているのですが、その中で苦労したことと言えば、主にイベントをするにあたって土日の方が家族連れで来やすいということや、私たち学生も授業等あるので、土日に日程を設定した方が集まりやすいと思っていました。しかし実際には、土日は小学生の子供たちがクラブ活動や予定で集まりにくいということが判明しましたので、平日でも子供たちが来やすい環境に私たちが合わせていかなければならないということになりました。また、平日がだめであればもっと早めに土日に「こういうイベントがありますよ」ということをもっと宣伝していかなければいけないということになりました。また、先ほど報告した『久下フェスタ』という新しいイベントを行いました。私たちが提案したときに具体的なことを考えておらず、大まかなことしか伝えていなかったのも、その思い描くフェスというものを実現するのにすごく時間がかかってしまったという点があります。それからフェスの前日準備を1日設けたのですが、看板製作や写真ブースで配る写真を現像で渡すか、データで渡すかという細かい部分を全然決めていなかったのも、前日にすごく慌てることになってしまい、もっと細かいところを考えて動いた方がスムーズに進んだのではないかなと考えています。また、今回このミライの輪に初めて参加させていただいたということもあり、他大学の方と連携を取ったり、地域の方と連携を取るということにもすごく難しさを感じる1年となりました。まだ全体的に準備とか日程で改善できるところはたくさんあるので、来年にそういった点をつなげて改善していきたいなと思いました。

次に、貢献できたと思うところなのですが、小豆を植えるところから収穫して分ける作業までを、最初と最後しか私たちはやっていないんですけど、そういう貴重な体験をさせていただいたということと、分ける作業は手作業でないとできないので、それに加わらせていただいたということがすごく貢献できたのではないかと思います。また、『久下フェスタ』というのもその地域を盛り上げることにもなったし、また「来年からも継続して行っていきたい」と言っていただけの

で、来年のそういうところにすごく貢献できたんじゃないかと感じています。

アウトプット方法ですが、地域の方にはこういったチラシを配ったり、Facebookに掲載したり、久下のホームページにも掲載して宣伝させていただきました。

今後の活動についてですが、先ほども言ったようにイベントを行っていかうと考えております。どういうふうに行っていくかと言うと、学生と地域の方々と連携を取っていき、できるかできないかじゃなくて、どういうことをしていきたいかという意見をお互いに述べていってそれをもっと特産品とかを扱った商品づくりに変えて、経済的に地域発展につなげるということを来年からしたいと考えています。どのようにつなげていくかと言うと、後輩にバトンタッチすることなのですが、こういう活動記録やパワーポイントを説明して、どういうことを改善していきたいか、どういうことをしてきたかというのを後輩につないでいきたいということを考えております。

以上で終わります。ご静聴ありがとうございました。

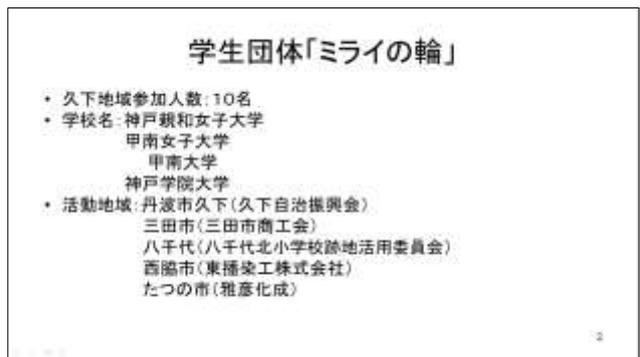
〔連携先の久下自治振興会の方からのコメント〕

久下自治振興会の荒木でございます。お世話になっております。学生さんにお世話になってもう3年になります。先生も一緒に来ていただいているいろいろな提案をしていただいているのですが、なかなかこちらの方の体制ができていないものから、学校側の対応が十分できていません。最近の活動としましては学生さんが来ていただいて、フェスタも盛り上がりましたし、それから今度20日に久下小学校も、5年生6年生になるのかな、と一緒に1時間取っていただいて、教室で児童にカルタを作るというような、そういう学校との連携をしております。その後餅つき大会をするということで、だんだん地域と学生のみなさんと楽しくやっています。そういう交流ができていくということは非常にありがたいなと思っています。そういうようなことで「地域を知る」という意味で学生さんもいろいろ来てもらうんですが、おくださんというような女性のグループとの交流もできております。今は交流だけというような格好かも分かりませんが、それをどんどん進めていって学校の方から提案いただく。また新しいものが生まれたらなと我々も期待しております。そういうような状況でございます。



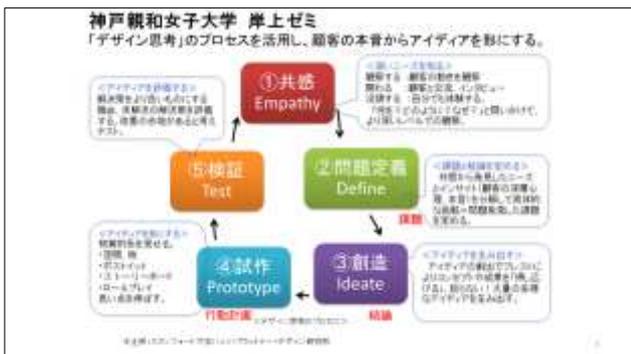
久下地域ブランド化

2016年12月11日(日)
学生団体「ミライの輪」
神戸親和女子大学 3年山口千羽・温 智子
甲南女子大学 3年長田 彩華



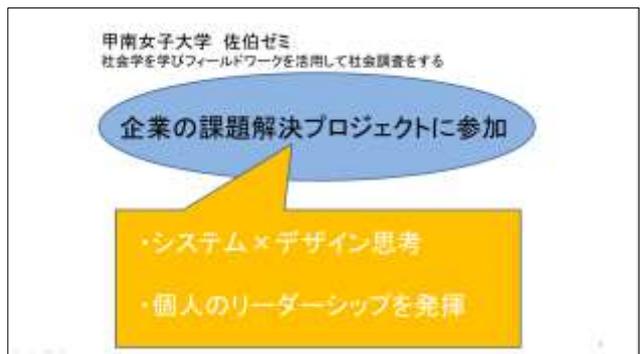
学生団体「ミライの輪」

- 久下地域参加人数: 10名
- 学校名: 神戸親和女子大学
甲南女子大学
甲南大学
神戸学院大学
- 活動地域: 丹波市久下(久下自治振興会)
三田市(三田市商工会)
八千代(八千代北小学校校地活用委員会)
西脇市(東播磨工株式会社)
たつの市(雅彦化成)



神戸親和女子大学 岸上ゼミ
「デザイン思考」のプロセスを活用し、顧客の本音からアイデアを形にする。

①共感 Empathy
②問題定義 Define
③創造 Ideate
④試作 Prototype
⑤検証 Test



甲南女子大学 佐伯ゼミ
社会学を学びフィールドワークを活用して社会調査をする

企業の課題解決プロジェクトに参加

- システム×デザイン思考
- 個人のリーダーシップを発揮

学生団体「ミライの輪」活動内容

- ・地域ブランド化
- ・地域活性化
- ・地域ビジネス創出
- ・ブランド創造

- ・フィールドワーク(インタビュー、仕事体験)
- ・イベント企画
- ・ミーティング

12月までの活動内容

1. 三宮にてミーティング
2. Skypeミーティング
3. あずき植え
4. 久下フェスタ
5. あずき観察+打ち合わせ
6. あずき収穫



1. 神戸三宮にて
～顔合わせミーティング～



6月17日(木)
イベント企画についての話し合い



次回

7月

あずき植えに決定



2. Skypeミーティング



活動前・活動後のミーティングは欠かせません!



3. 7月23日(土)あずき植え



穴をあける

あずきの種をまく



天候に任せますよっ!



地元で収穫した野菜



久下地区の方々も交え、
次回の活動の打ち合わせ



お米が絶品!!!!



4. 久下フェスタ
9月17(土)・18日(日)
①前日準備 ②本番



久下フェスタ・実施内容

1. 舞台パフォーマンス
- 地域の方々・出し物
- 親和女子大学・軽音部による演奏
1. 写真ブース
(親和・早稲女子大学主催)
3. コミュニティ喫茶おどさん
(コーヒー・ジュース無料サービス)



16

影に残るもの..何かないかな?

写真ブース



16

一眼レフ・スタジオセットで本格的
思い出に残る一枚に仕上げます!!



17

①9月17日(土) 前日準備



持ち寄った折り紙で飾りづけ!

18

②9月18日(日) 当日



19



久下地区の恒例行事
になればいいなあ

20

初の音楽イベント開催

山崎・久下自治会館で学生団体主催
地域の5グループなど出演



! 神戸新聞に掲載!

21

5. 10月17日(月) あずき観察+打ち合わせ



22

約4か月後...



23



地元でとれた野菜を
ふんだんに使用した特製カレー
お米がツヤツヤ

24



11月29日(火)
あずき収穫

一本につき5〜6粒



一つ一つ丁寧に分けていきます

収穫したあずきを使って・・・



12月に餅つき大会を実施予定



これまでの活動を通じて感じたこと

◎苦勞した・改善しなければいけない点

・土日は子ども達はクラブ活動や予定があり集まりにくい→授業の
一環・土日は2、3か月前に宣伝

・新しいイベント(9月に行った久下フェスタ)を
行うにあたって具体的な
案を考へておらず、
なかなか受け入れてもら
えなかった。



・久下フェスタ前日準備日に決めてすることが多
かったのでバタバタした。→作業の細かいところ
まで決めておき、動きやすいようにしなければなら
ない

・他大学の人と連携をとるのが初めてで一緒に
進めていくこと

・自分の大学、他大学、地域の人との連携と日程
調整



◎地域に貢献できたと思うこと

・あずき植への作業

・イベントをしてことにより
地域を盛り上げることができた



・新しいイベントを行ったことで、このイベントを
継続させたいと地域の方に思ってもらえる
イベントとなった。

・神戸新聞さんに取り上げてもらい久下地区を
少しでも知ってもらえるきっかけを作れた。

活動のアウトプット方法

・地域にチラシを配布と
SNS(Facebook)に掲載



・久下のHP「久下発」
に掲載

<http://kuge.tamba.city/from/?e5%4a7%e5%ad%a6%e9%80%a3%e6%90%ba%4%ba%8b%e6%a5%ad-%e5%88%9d%e3%82%81%e3%81%a6%3%81%ae%3%80%8c%e4%b9%85%e4%b8%8b%e3%83%95%e3%82%a7%e3%82%b9%e3%82%bf%e3%80%8d%918/>



～今後の活動について～

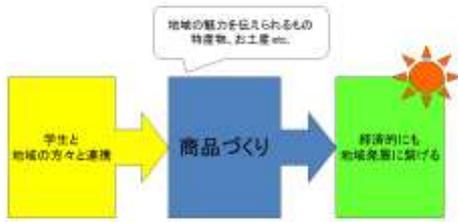
①活動を続けていくための課題

②自分たちの活動をどのように繋げていくか

①活動を続けていくための課題

イベント・事業を行う

①活動を続けていくための課題



②自分たちの活動をどのように繋げていくか

後輩にバトンタッチ



②自分たちの活動をどのように繋げていくか



ご清聴ありがとうございました



(4) ささやまファン倶楽部

これからささやまファン倶楽部の活動報告をしていきたいと思います。私はささやまファン倶楽部の代表を務めております尾谷と申します。よろしくお願ひします。

まず、ささやまファン倶楽部は2010年に神戸大学農学部『実践農学入門』という授業がきっかけで設立されたサークルで、今年で7年目のサークルになります。この1年間ささやまファン倶楽部は3つの活動目的を掲げて活動してきました。まず1つ目の活動目的は『里山・休耕田の活用』というものです。私たちささやまファン倶楽部が活動している篠山市真南条地区というところには使われなくなった里山や休耕田が残されています。その放置された里山や休耕田をなんとか有効活用できないかと私たちは考えて、地域の人たちの憩いの場として利用できるように整備を進めていきました。2つ目の目標が『地域の農業の活性化』ということで、現代の日本の農業は農業の担い手不足であったり農業従事者の高齢化など多くの問題を抱えております。篠山市真南条地区でも例外ではなく、労力のかかる農作業をお年を召した方がされております。その方々のお手伝いに少しでもなったらいいなと思ひまして、農業ボランティアを進めています。3つ目に『地域のイベントを活気づける』ということで地元のイベントがいろいろあるのですが、そのイベントに積極的に参加して大学生という立場からイベントを盛り上げたりしました。

次に、具体的にどういふ内容をしたのか説明していきます。まず1つ目の『里山整備』ということで、元々里山に遊歩道があったのですが、その遊歩道が雑草に覆われていて、通れない状態でしたので、その雑草を手で刈って通れるようにしました。後で地元の方に聞いた話ですと、時々この里山に地域の子供たちが遊びに来て活用されているようなので、遊歩道の整備も少し効果があったのかなと思ひます。それに加えてただ山を切り開いていだけでは整備とは言えないと思ひますので、自然環境を守りながら整備活動を続けていきたいと考えております。『里山整備』と言ひましたが、いまい自分自身どういふふうに里山を整備したら良いか分からなくて、あまり有効に活用できなかったなというのが今年の反省としてあります。なので、来年以降は地域の人の声をもっと聞いて、どういふことを地域の人は求めているのかというのを重点的に考えながら、地域の人と共に管理・整備を進めていきたいと思ひます。それに加えて先ほども申し上げたとおり、自然にも人にもやさしい環境づくりを進めていきたいと考えています。『休耕田の整備』なのですが、現在田んぼビオトープとして休耕田を利用してあります。昨年以前にそのビオトープに1つ橋を架けたのですが、今年新たに橋を2つ架けました。こんなふうにして木材を切り出して、だいたい手作業で作業を進めていきました。小さい子供たちに遊んでもらうことを考えて、安全に遊べるようにデザインを考えました。設計の際には自分たちだけではできませんので地元の方々の協力も得ながら作業を進めていきました。これは課題なのですが、先ほどの里山整備にも通じますが、やはり自然環境を壊して行く整備は、整備とは言えないと思ひますので、生物多様性を保持しながらその整備を進めるためにどうしたら良いのかなというのが今年度の課題でした。今年1年行って、生物多様性を守るためにはその環境の動植物の生態や整備についてちゃんと専門的な知識がないとできないなというのがすごく思ひたことです。そのためにですが、神戸大学農学部の元教授の方にお越しいただいて、真南条周辺の植生調査を一緒に行ひました。こういふふうにして教わった知識ですとか、あとは大学で学んだ知識などを活かして、今後『里山整備』や『休耕田の整備』を進めていきたいと思ひます。

次に、『地元の農業の活性化』ということで、真南条の特産品は『丹波の赤じゃが』というのですが、その土寄せ作業であったり後は収穫作業のお手伝いなどもさせていいただきました。この『丹波の赤じゃが』というのはネオデリシャスという品種でして、皮が赤くて中身が黄色いというとても甘くて美味しいじゃがいもで、何年か前に神戸大学の農学部と地元の営農組合が共同で開発したじゃがいもです。まだまだ知名度が低いので今後広めていけるように活動できたらなと思ひています。

『地域のイベントの参加』ということで、いろいろな地域のイベントにも参加させていいただひています。これは『かかしづくりコンテスト』ということで、地元でかかしを一般の人に作ってもらってそのユーモアさや出来の具合を競うという

コンテストにも参加しました。その後に『赤じゃが』の商品販売のお手伝いなどもさせていただきました。地元の敬老会にも参加しました。敬老会では食事の準備をしたり、ビンゴ大会の企画などもしました。敬老会をしたときに参加されたおばあさんの方から、「若い人たちがこの地域に入って来てくれて嬉しい」と言っていただけたのが私たちもとても嬉しかったです。このような活動をしてきましたが、どの活動も地域の方々の協力なしではできないと思っておりますので、今後も地域の方々の協力に感謝しながら活動を続けていきたいと思っております。

これで発表を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。



活動目的

- 里山・休耕田の活用
- 地元農業の活性化
- 地元のイベントを活気づける

活動内容

- ①里山・休耕田の整備
- ②地域農業の活性化
- ③地域のイベントへの参加

①里山整備

里山の遊歩道の整備をしました。地域の子ども達の遊び場として活用されているようです。

自然に生い茂った雑草を刈り取りました。

草刈り後の様子

①里山整備

より有効に活用するにはどうしたらよいか？

↓

来年度の課題

地域の声を聞き、地域の人と共に管理・整備する

自然にも人にも優しい環境づくりを進める

①休耕田の整備

有用な雑草などもないためほぼすべての工程を手作業で行いました。

木を振り出して木製の橋をゼオトープに構築しました。

①休耕田の整備

子供達に楽しんでもらえるようにかつ安全であるように橋のデザインを工夫しました。

①休耕田の整備

生物多様性を保持するためにどうすればよいか？

↓

来年度の課題

動植物の生態について理解を深め科学的に適切な管理を行う

①休耕田の整備

種物に詳しい元神戸大学農学助教授の先生と共に真南条地区の休耕田整備を行いました。



終わった時間を基に設備のありかたを考慮していきたいと思っています。

②地域農業の活性化

真南条の特産品である「丹波の赤じゃが」の土寄せ作業や収穫作業などを地元の農家さん方と一緒にを行い、少しでもお役に立てるようにお手伝いしました。



③地域のイベントへの参加

様々な地域のイベントに参加し、幅広い世代の方と交友を深めました。



豆かかしづくりコンテスト



③職生会



(5) 神戸山手大学歴史文化ツーリズム研究会

神戸山手大学歴史文化ツーリズム研究会です。よろしくお願いいたします。まず、私たちは神戸山手大学現代社会学部観光文化学科の学生2回生から4回生まで合わせて20名で構成されています。普段は主に観光に関する授業を履修しています。活動場所である篠山市福住地区は2012年に篠山市内で2番目の重要伝統建築物群保存地区に指定されています。宿場町と農村集落という異なる2つの歴史的景観が広がる地区です。連携している地域団体は福住集落川原自治会と一般社団法人かつらの2つです。

次に活動内容の概要を説明します。一本杉販売所での販促活動、地域との交流として意見交換会の実施、行事・祭礼への参加、獣害対策として対策活動へのお手伝い、新しいジビエ料理の開発などに取り組んでいます。頻度としては月1回から2回程度です。これまでの活動としましてはこちらのとおりです。こちらは3つのテーマごとに分けて詳しく活動内容の報告をいたします。

まず1つ目のテーマは、『一本杉販売所の販促活動』についてです。10月15日に一本杉販売所において黒枝豆の収穫祭を開催いたしました。さらに既存の一本杉販売所、Facebookの活用にも着手しました。更新頻度が少なく、内容もバラバラであったため、地元の人に代わって私たちが記事の更新をすることにしました。広報担当の学生を2名選定し、週1回程度の定期的な更新を行っています。その結果閲覧数が上昇し、グラフをご覧いただいても分かるとおりのいいね数も順調に増加しています。赤い矢印があるところが、私たちが記事の代行を始めた時期です。次に黒枝豆収穫祭の開催時に、並行して行った一本杉販売所でのアンケート結果を紹介いたします。「どこから来られましたか？」という質問では半数近くの方が大阪府、京都府と両府に繋がる国道に挟まれた福住ならではの回答が得られました。「何度目の来店ですか？」という質問には約7割が初めてでした。「なぜ来店されているのですか？」という質問では「新鮮だから」「おいしいから」という理由が合わせて約4割の一方、その他の答えが半数を占めました。その他の意見としては右のとおりです。これらを受け、私たちが考える一本杉販売所の今後の課題としては、注目されるキラコンテツを開発、一本杉販売所をターゲットにきたという人や、リピーターを増やすこと。そして、Facebook更新の継続が挙げられました。

2つ目のテーマは『地域との交流』についてです。私たちが参加したのは、水無月祭、納涼夏まつり、八朔祭、春日神社の祭礼の4つです。こちらが実際に参加した祭りの写真です。始めに左上は住吉神社の水無月祭です。右上は旧福住小学校で開催される納涼夏まつりです。左下は熊野神社で開催される八朔祭です。右下は西紀地区で行われた春日神社の祭礼です。私たちが感じた課題は、『伝統的な祭りの消滅』です。幼い子供は多く見られましたが、山車の担ぎ手となる中学生、高校生、20代前後の若者が少ないことが分かりました。今のままだと、これまで受け継がれてきた伝統的な祭りを後者に継承することが難しくなります。この打開策として、祭りを交流の場とすればいいのではないかと考えました。地域の住民のみならず、地域の若者が参加することによって祭りを継承するとともに、昔のような賑わいが取り戻せるのではないかと私たちは考えています。

3つ目のテーマとして『獣害への取り組み』について説明いたします。まず、獣害対策に関する活動です。6月下旬、私たちはNPO法人里地里山問題研究所、通称『さともん』の活動に参加しました。この日は鹿用檻の設置を始め、電気柵の設置、修復作業の手伝いを行いました。次に電気柵と捕獲檻について説明します。皆さんご存じのとおり、電気柵は動物が柵に触れた際に電気ショックを与え、田畑への進入を防ぐために設置しました。次に捕獲檻は檻の中にえさを用意し、それにつられて中に入った動物を捕獲、田畑を荒らす動物の数を減らすために設置しました。今回は最新のICT技術が搭載されている檻を使用しました。害獣が檻に近づくことで罫周辺のセンサーが反応し、メールが送信される仕組みです。センサーで撮影した映像を見ることが可能となっており、遠隔操作によって害獣を捕獲するタイミングを自分たちで決めることができます。獣害対策に関する課題としては、『捕獲に関する課題』と『地域資源としての活用』の2つです。

『捕獲に関する課題』としましては、檻や電気柵の設置場所についてです。現状として、継続的に鹿が檻付近にまで下

りてきていますが、捕獲には踏み込めていないため、檻の中へスムーズに入ってくれる方法を考えていく必要があるのではないかと考えられます。次に、若者を中心としたハンターの育成です。近年の猟師の年齢層の上昇に伴い、年々猟師数が減少しています。若者から積極的に動くことで害獣の減少や耕作放棄地の縮小へと繋がっていくのではないかと考えられます。次の『地域資源としての活用』に関しては、観光文化学科に所属する私たちが主に注目していこうと考えているものです。獣害と観光を結びつけることで福住地域の観光へとつなげていきたいという思いがあります。また、地域資源としてジビエ料理の食材としてPRしていこうと考えています。

次に獣害への取り組みの2つ目として、『ジビエ料理への活用』というテーマで説明いたします。『ジビエ』とは狩猟で得た天然の野生鳥獣の食肉を意味し、ヨーロッパでは貴族の伝統料理として古くから発展していた食文化です。日本でも野生鳥獣の食肉は冬期に農業が困難となる山間部の寒冷地などで貴重なタンパク源として食されていたそうです。また、近年では獣害の改善策として捕獲した害獣を地域資源として、地域活性化やPRを行う地域が増えています。その例として、『くまもとジビエ研究会』は鹿や猪の肉を地域資源として有効活用することで、獣害被害軽減につなげていくことを目的に、熊本県が中心となって立ち上がりました。日本ジビエ振興協議会が主催する『全国ジビエサミット』にも出展し、全国にジビエ料理をPRしています。是非私たちと一緒にこの篠山でジビエサミットを誘致し、開催してみませんか？

以上神戸山手大学歴史文化ツーリズムでした。ありがとうございました。

〔連携先の川原自治会の方からのコメント〕

ご苦労さんでした。いろいろ発表していただいて、すばらしい発表でした。ありがとうございます。今福住の方でも獣害がひどいので、2週間前にずっと夜に鹿の状況を調べに回りました。軽自動車にライトを右と左に付けて。そしたらなんと50頭近くずっと鹿がうろうろしています。場所については福住校区内、そこらへんをずっと回ってみたんですけど、それほどたくさん鹿がいると。中には猪のグループもありました。ですから何度か柵を利用して取って、それでバーベキューをしたいなということで、一生懸命3ヶ月前から檻を作りまして、遠隔操作ができて、いつでも感知したら動画を閲覧できます。ところが猪も出入りするんですけど、できれば5頭ほどまとめて取りたいなと目論んでいまして、今は取れてないのが実情ですが、今年中にはなんとか取りたい。そしたら皆さんと一緒にバーベキューをしましょうということです。それとあとは、地域の方が皆さんのお越しをずっと「あの子はいつ来るのかな」という感じで待っていてくれますので、今後も引き続き活動のご協力よろしくお願ひしたいと思います。ありがとうございます。

福住地域での活動における 中間報告

神戸山手大学 歴史文化ツーリズム研究会

◎ 団体の概要

□ 神戸山手大学 現代社会学部 観光文化学科
2回生：2名 3回生：14名 4回生：4名 ⇒ 計20名

□ 普段勉強していること（授業例）

- クルーズツーリズム論
- 文化遺産活用論
- 観光プロモーション論
- 障がい者旅行論
- 観光政策行政論 etc



◎ 活動場所

□ 2012年、篠山市城下町地区に次ぎ、篠山市で2番目の重要伝統的建造物群保存地区に指定

□ 江戸時代には宿場町として栄えた一方、川原・安口・西野々では農村集落も広がるという、異なる2つの歴史的景観が共存する地区である



◎ 地域団体の事業内容

□ 福住集落川原自治会
□ 福住集落および川原地区の活性化
□ 獣害対策

□ 一般社団法人《かつら》

- 一本杉販売所における農産物販売事業
- 一本杉販売所内の地産地消レストラン運営
- 福住地区まちなみ案内所の運営



◎ 活動内容の概要

□ 内容

- 一本杉販売所での販促活動
- 地域との交流
 - 意見交換会の実施
 - 行事・祭礼への参加
- 獣害対策
 - 対策活動のお手伝い
 - 新しいジビエ料理の開発

□ 頻度

- 月1～2回程度
(多い月は3回)



◎ これまでの活動



5月	・現地で事業計画に関する打ち合わせ	9月	・現地交流会で鹿焼肉丼の試食会を実施
6月	・獣害対策の手伝い（鹿用柵の設置作業）	10月	・一本杉販売所で販促イベント
7月	・獣害対策の手伝い（黒枝豆畑の整備） ・水無月祭への参加	11月	・大学祭でジビエ料理を販売 ・10月販促イベント及び大学祭の結果報告と分析
8月	・納涼祭に参加 ・八幡祭に参加 ・10月の販促イベントに向けて検討 ・地域交流	12月	・中間報告会

活動内容の報告

- ① 一本杉販売所の販売促進活動
- ② 地域との交流
- ③ 獣害への取り組み
 - i) 獣害対策に関する活動
 - ii) ジビエ料理への活用



① 一本杉販売所の販促活動 黒枝豆収穫祭を開催

□ 日時：2016年10月15日（土）

□ 場所：一本杉販売所

□ イベント内容

- 黒枝豆収穫体験
- 黒枝豆試食販売
- 福住ガイドウォーク
- 重さ当てゲーム
- 福住クイズ



①一本杉販売所の販促活動 Facebookページの活用

- 一本杉販売所FBページの更新が少ない
 - 数か月に一度の更新
 - 更新内容がばらばら



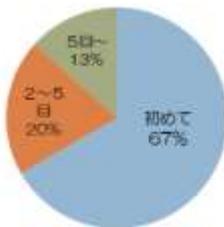
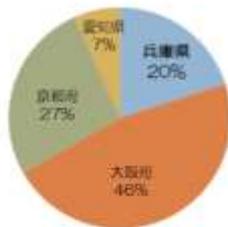
- 定期的にFB更新（週1回～程度）
 - 広報担当の学生が地元の人と定期的に連絡をとり、情報・写真を送ってもらってFB更新を代行
⇒閲覧数が上昇

①一本杉販売所の販促活動 Facebookページの活用



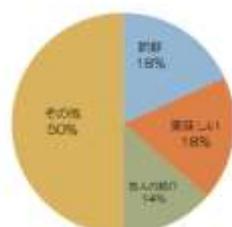
①一本杉販売所の販促活動 アンケート結果

- どこから来られましたか？
- 何度目の来店ですか？



①一本杉販売所の販促活動 アンケート結果

- なぜ来店されたのですか？



- その他の意見
 - テレビで見て食べたかったから
 - たまたま通りがかって見つけたから
 - 黒枝豆をたくさん売っていたから

①一本杉販売所の販促活動 今後の課題・目標

- 注目される商品（キラーコンテンツ）の開発
 - 福祉に関連する素材を使用した商品
 - 地域住民と一緒に考案した商品
- 通りすがりの人でなく、一本杉販売所を自当てに来たという人やリピーターを増やす
- Facebookの更新の継続
 - 今よりも情報のバリエーションを増やし、たくさんの方に見てもらえるようにする



②地域との交流 行事・祭礼への参加

日時	祭礼
2016/07/30	水無月祭
2016/08/06	納涼夏まつり
2016/08/31	八朔祭
2016/10/16	春日神社の祭礼



- 目的
 - 地域住民との交流
 - 伝統的なお祭りを知る、体験する
 - 活気のあった頃の祭りの話を聞き 祭りに参加し活気づける



②地域との交流 参加した祭りの様子



③地域との交流 今後の課題・目標

- 伝統的な祭りの消滅
⇒祭りを交流の場にする
ex.体験交流型
地域の中学校・高校と連携する
地域の良さを伝える



➡ 昔の賑わいを取り戻す

③ 獣害への取り組み i) 獣害対策に関する活動

- NPO法人里地里山問題研究所（さともん）の活動に参加
- 鹿用柵設置・電柵の設置作業・修復作業の手伝い



③-i) 獣害対策に関する活動 電気柵について

目的

- イノシシやシカなどの畑などへの侵入を防ぐ



効果

- 動物が触れた際に、電気ショックを与えて畑に近付かないよう追い払う



③-i) 獣害に関する活動 捕獲柵について

目的

- 田畑を荒らすシカやイノシシを捕獲する



効果

- シカやイノシシの数を減らす



③-i) 獣害に関する活動 捕獲システムについて

□ ICT技術を用いた最新システム

- 農周辺のセンサーが反応すると、管理者にメールが送信される
- リアルタイムでスマートフォンやパソコンから、農の監視と遠隔操作が可能
- 任意のタイミングで捕獲が可能



③-i) 獣害対策に関する問題 今後の課題

- 捕獲に関する課題
 - 設置場所の変更
 - 若者を中心としたハンターの育成
- 地域資源としての活用
 - 獣害の観光利用
 - 駆除だけでは無く地域資源としてジビエ料理の食材としてPR



③ 獣害への取り組み ii) ジビエ料理への活用

- 狩猟で得た天然の野生鳥獣の食肉を意味するフランス語
- 貴族の伝統料理として古くから発展してきた食文化



③-ii) ジビエ料理への活用 日本でのジビエ料理

- 貴重なタンパク源として「獣肉」「山肉」といった山の幸が縄文時代から食べられていた
- 8割が猪肉・鹿肉で、中にはウサギ・サル・クマも食べられていた



③-ii) ジビエ料理への活用 地域PRしている例

□ くまもとジビエ研究会

- 平成24年9月、鹿や猪の肉を地域資源として「くまもとジビエ」として、有効活用する事で被害軽減に繋げていく為に狩猟に携わる方と関係市町村、県内のレストランで発足された。



第一回
ジビエサミット
2015年2月5日～6日
@とりぎん文化会館



2016 日本ジビエサミット
川上と川下の相互理解
28-30 NOV 和歌山
第二回
ジビエサミット
2016年2月11日～13日
@アクロス福岡

③-ii) ジビエ料理への活用 大学祭での出品

- 鹿焼肉丼
- 鹿串焼き
- 黒枝豆



材料はすべて
篠山産
を使用しました

③-ii) ジビエ料理への活用 大学祭での売り上げ

- 鹿焼肉丼 ⇒ 500円 × 164食
- 鹿串焼き ⇒ 300円 × 66本
- 黒枝豆 ⇒ 100円 × 30カップ

③-ii) ジビエ料理への活用 大学祭での売り上げ

- 鹿肉 ⇒ 8kg
- 黒枝豆 ⇒ 10株
- タマネギ ⇒ 20kg
- 篠山産米 ⇒ 10升

完売!!

③-ii) ジビエ料理への活用 大学祭での購入者の評価

- 年齢層
 - 比較的幅広く、子どもから年配の方まで様々
- ポジティブな評価
 - 臭みがなく美味しい
 - 想像以上に柔らかい
- ネガティブな評価
 - 量の割に値段が高い
- もっと値段を高くしていいのでは? という意見も。



◎ 活動を通じて感じたこと

- 地域に貢献できたと思うこと
 - 獣害防止の設置
 - 鹿肉の美味しさを伝えられた
 - 地域行事に参加し、活気が生まれた
 - Facebookの更新頻度を増やすことができた
 - 木の伐採作業のお手伝いで活躍できた
- 苦勞したこと、困ったこと
 - 学生側と地域側との意識・感覚・意見の違い
 - 地元の方との連絡のやり取り
 - 一本杉販売所の販促方法
 - イベントでは最後まで見通しが立たなかった



◎ 昨年度との比較

昨年度の課題	今年度の取り組み
<ul style="list-style-type: none"> 鹿肉のPRと販売情報の普及が必要 	<ul style="list-style-type: none"> 現地での鹿焼肉丼の試食会
<ul style="list-style-type: none"> 福住の特産物を活かした体験型観光の開発 	<ul style="list-style-type: none"> 大学祭で鹿肉をPR
<ul style="list-style-type: none"> 獣害対策支援への取り組み 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の方と、獣害対策として、樞・電気柵の設置 一本杉販売所で黒枝豆収穫体験イベントを開催
	<ul style="list-style-type: none"> FBでの情報発信

活動のアウトプット方法

- SNS・インターネットを利用
 - 個人のFacebookを通じて活動を紹介
 - 大学公式Facebookで、活動内容を掲載
 - 大学HPに活動の記事を掲載
- 学内での宣伝
 - オープンキャンパス来場者に活動を紹介
 - 黒枝豆収穫祭のチラシを配布
 - 大学祭で、今までの活動をまとめたアルバムを展示

活動のアウトプット方法



今後の活動について



12月	・フォーラムにて中間報告
1月	・冬の販促イベントに向けての打ち合わせ ・エコツーリズムのジビエツアーに参加
2月	・冬の販促イベントの実施 ・獣害とジビエ料理のフォーラムを企画開催予定
3月	・活動結果の総括を現地でも報告

今後の活動について

- 活動を続けていくための課題
 - 周りからの協力を得る
 - イベントを成功させるなど結果を残し、地域住民からさらなる理解と信頼を得る
 - 自分たちの活動を知ってもらい、同じ大学の学生のみならず、他大学の学生や一般の方など、活動に参加してくれる人を募る
 - 一本杉販売所の様々な販促方法を考える
 - 販売所とお客様のニーズ、流行を取り入れる
 - SNS以外の宣伝を強化する

自分たちの活動を地域にどのように繋げたいか

- 福住の新たな魅力を伝えて観光客を増やす
 - 駆除した害獣(鹿、猪など)を一つの地域資源として、自分たちの考えたジビエ料理を福住の目玉として他地域の人にSNS等でPRする
- 地域の抱える課題に取り組む
 - 福住の方と協力して、私達と一緒に地域の問題に取り組み、福住の活性化に繋げていく

これからの課題

- 一本杉販売所の販促方法について
 - 販売所と重建地区を合わせたイベントを企画・実施し、PRなどを通して認知度を上げ、集客数を増やす
 - 研究会のFBページを作成し、活動内容の紹介や宣伝に力を入れる
- 地域との交流について
 - 地域の行事・祭礼などへの参加
- 獣害対策への取り組みについて
 - 設置した檻での鹿捕獲を目指す
 - ジビエ料理の美味しさを多くの人に味わってもらえるイベントを企画・実施する

福住を盛り上げるために頑張ります!!



(6) 兵庫医療大学東洋医薬部門

発表を始めさせていただきます。兵庫医療大学東洋医薬部門、代表の池田実姫です。私たちは、『丹波地方の薬用作物や農産物の新たな活用法を発見する』というテーマで、今年度から活動を開始しました。

兵庫医療大学は、こちらのような学校です。薬学部、看護学部、リハビリテーション学部があり、兵庫医科大学の姉妹校です。ポートアイランドに位置しています。

構成としましては、5年生、4年生、3年生、2年生で、この人数で構成しております。

活動の内容は、実際に栽培されているさまざまな丹波農産物や薬用作物、主にトウキという生薬の独自の調理法やレシピなどを考案することで、新たな活用法を考え、使用されていない利用可能な資源を発掘することです。

私たちは、山南町薬草トウキ生産部会や丹波農林振興事務所農業普及センターの皆様にご協力いただきながら、丹波市で栽培されているトウキの薬として使用されずほとんどが廃棄されてしまう葉について、活用方法を考えました。そして薬食同源の考えから、これら身体に良いと思われるレシピを考案し、普段の食事にも健康を心掛けていただくセルフメディケーションを推進していきたいと考えました。

まず、7月の活動としましては、トウキ部会や丹波農林振興事務所の皆様にお世話になり、丹波市山南町の農家さんのトウキ畑で、トウキのお世話をさせていただき、試作用のトウキの葉を採集しました。そのあと、丹波市薬草薬樹公園にて、同施設の支配人様、丹波県民局の方々と大学のメンバーで今後の活動について意見の交換会を行いました。その結果、山南町和田地区の方々に「漢方の里として再興させたい」という強い思いがあることを知りました。そこで、私たちにできることとして、当初の事業目的でもあるセルフメディケーションを指向したトウキの葉を使ったレシピの考案や丹波薬草振興を指向した生薬や丹波の薬草文化に関するポスターを作成し、和田地区で行われる『漢方の里まつり』でトウキをはじめとした山南町和田地区で栽培されている生薬を紹介することにいたしました。

それから、10月の『漢方の里まつり』に向け、まずはトウキの葉を使用したレシピを考案いたしました。このように考案したことを形にしました。一つ目はトウキの葉を用いたコンソメスープを作り、またこちらはトウキの葉を用いたクッキーです。丹波地域の薬草文化に関するポスター作成では、丹波での漢方の歴史や丹波地方で栽培される生薬を調査し、ポスターを作成しました。

そして、『漢方の里まつり』当日は、お祭りに来られた地元の方々にトウキの葉を使ったコンソメスープとトウキの葉のクッキーの試食と丹波地域の薬草文化に関するポスターを利用した説明などをさせていただきました。このことは、地域の方々と繋がりや信頼関係の一助になったと考えております。

私は、薬草については、教科書やネット上での知識しかなかったのですが、実際に畑に足を踏み入れ、手にすることで、薬草の感触やにおいなどのその場に行かないと分からないことばかりでした。また、栽培されている農家の方々のお話を直接耳にすることで、薬草の産地としての実績や知見の豊かさ、漢方の里として再興させたいという要望を知りました。私たちの知識と農家の方々の知識や知恵を混ぜ合わせることで、新たなものを作り上げられる気がいたします。そこでまず、トウキの葉の利用法の一つとして料理レシピを考案いたしました。また、考案だけでなく『漢方の里まつり』に参加させていただき、ご提供の場を設けていただきました。トウキの葉を食事として利用することでセルフメディケーションに繋がることも提案させていただきました。

活動において苦労したことは、レシピの考案、試作でした。ただ単に食材を考えるのではなく、それぞれの食材の性質や身体にもたらす効果作用を調べ、薬食同源の考えを元にレシピの考案や試作することに難しさを感じました。また、トウキの葉はそのまま使用しますと舌にしびれを感じることから、風味を損なわず、そのしびれを取り除く条件決定が少し困難でした。また、トウキの葉がどのくらいの期間なら使用可能かということで、保存方法の検討にも苦労いたしました。地元での活動に関しましては、地元の自治会並びに薬草薬樹公園の皆様、丹波県民局の皆様の多大なるご協力の下、大変順調に行えましたことを心より感謝しております。

活動を続けていくための課題としては、今回はトウキを主に取り上げましたが、他にもタチバナなどの生薬、薬草が山南町で栽培されているので、もっと知識を深め、丹波農産物とのコラボレーションさせたものを作成し、今後、地域の活性化をもとに幅を広げていきたいと考えております。また、もっと地域との関わりを深め、これを機に地域の方々に薬草の産地としての重要性や希少性を伝えられるように繋げていきたいと望んでいます。事業目的でも述べましたが、セルフメディケーション、これは自分自身の健康に責任を持ち、軽度な身体の不調は自分で手当をするという意味があり、私たちは薬学部の学生としてこれを地域の方に発信することで、地域の方々の健康にも寄与する形に繋げることができるような活動になるようにしたいと思います。

先ほど『漢方の里まつり』において、うちでトウキスープとトウキクッキーの店ともう一つポスターを掲示させていただいたという話をしたと思うのですが、そのポスターについて僕の方から詳しく話させていただきたいと思います。A0サイズの身長くらいある結構大きなポスターを2枚ほど作成させていただきました。その内容としては、漢方という誇るべき日本の医学について簡単に触れたものであったり、あと丹波市の歴史ある漢方文化の成り立ちであったり、丹波で栽培される生薬について等、漢方についてのインターネットで調べればすぐ出てくるような簡単な内容ではあるのですが、基本的な知識を載せたポスターを掲示させていただきました。ポスターの前に来ていただいた地元の方に簡単な内容なのですが、説明などをしていると、この地域は漢方のすごい歴史ある栽培地で、その地元の方にこんな基本的なことをわざわざ言うことに意味があるのかなと半信半疑な気持ちでいろいろな話をさせていただいたのですが、意外と地元の方でも地元の漢方の文化について知らない方がとても多いことが分かりました。例えば、漢方は日本の医学であると知っている方ってどれくらいいますかね。漢方は中国の医学と思っている方が結構いると思うのですが、それは違って、由来は中国のものなのですが、中国から伝わってきたものが日本で独自に発展してきたものです。中国の漢方は『中医薬』といって全く違うものになってくるんですね。漢方という日本の医学について知っている方はほとんどいらっしゃいません。

地域活性化において、もちろん外にどのようにPRしていくかという活動もとても大事だと思うんですけど、まずは地元の方に地元の文化をどういうふう知ってもらうか、どれだけ知っているかということも大事だと。実際に説明してみても、意外にもほとんど知らなかったもので、地元の方にこのポスターの内容とか感心してもらえることがすごく多かった印象です。今後そのことを伝えていくために、今回はA0サイズの大きなポスターを祭りとは別に薬草薬樹公園の建物の中で掲示するだけだったのですが、それを小さな冊子にして屋外で祭りに来ていただいた方に実際に紙を配ってみたり、地元の方に実際に意識調査のアンケートを取ってみて、目に見える形でどれだけ地元の方が自分の地元のことを知っているのかなというのを一度調査してみたら良かったなというのが終わって見た後の課題、反省点として感じました。あと、先ほど（の神戸山手大学歴史文化ツーリズム研究会の発表の際に）鹿肉の話でとても盛り上がっていたと思うのですが、うちの方で生薬とあと地元の丹波の食材を掛け合わせた新しいレシピを考案するという中で、鹿肉とトウキの葉っぱを一緒に煮て、新しいレシピを作ることができないかということで少しレシピの方を考えていたのもあったので、もしかしたら鹿肉の独特の臭さであったりとかをトウキの葉、あれもすごく独特な匂いがするのですが、なんとか掛け合わせて新しいレシピを考案できるのではないかなと。協力することができるのではないかなと思ったので、今後よろしくお願ひしたいと思います。

今後の予定として、さらにトウキの葉を使用したレシピを考案しようとしております。試食会を2月か3月に丹波市立薬草薬樹公園にて行いますので、お時間の都合のつく方はどうか是非お越しください。活動場所はこちらです。また、大変お世話になっている地域団体もこちらです。本当に、今年度だけではなく、これからも続けていきたいと思ひますので、今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

以上で発表を終わります。

【連携先のふるさと和田振興会の方からのコメント】

こんにちは。私は今ご紹介にありました『ふるさと和田振興会』の代表を務めております武田と申します。実は今日参

加させていただいたきっかけというのは、ちょっとしたきっかけです。まず丹波新聞にこの漢方のトウキの葉が捨てられている記事が掲載されました。記事になるまで地元の者も何も気付かなかった。そういうところから私どもは、自治会を始めとして地域の者が大学へお願いに行きました。すると快く兵庫医療大学の副学長さんの先生と教授の皆さんにお会いいただいて、とんとん拍子に話が進みました。『漢方の里まつり』には過去最高の人数の方に来ていただきました。京阪神各地から。なぜかと言いましたら、祭りのチラシの後援のところに兵庫医療大学という名前が入ったこと。それで、ものすごく地域が沸きました。なぜかと言いますと、地域のイベントを計画する中で、漢方は薬事法に引っかかるから、焼きそばを売ったり、おうどんを売ったり、そういう繋がりばかりになっていました。『漢方の里まつり』には生産者と一緒に大学も交えては今回が初めてだったのですけれども、そういう地域を沸かしたことがものすごく大きなニュースになりました。というのはこの祭りは24年間続いておりました。山南町から6町1市の丹波市になって、市も大きくなったので助成金がもらえなくなった。ということで、本当に苦勞して苦勞してやってきました。一つの小さな新聞記事を参考に、私どもの目の前にはものすごい情報がたくさんあるんだなということがやっと分かりました。地域は今ものすごく過疎化していますが、活性化しています。それはやっぱり、地域の宝物をいかに発掘するかというのは若い人の力、大学の力であって、今回ものすごく励みになった。また来年も本当に楽しみにしているということで、地域も盛り上がっております。どうか、皆さん方の若い力ですね、埋もれている力が若い方の力と行動をしていくという。特に田舎の、丹波市と言っても小さな町ですので、行政と一緒にやらないといけない。その中で、皆さんご存じかもしれませんが、一軒一軒に防災無線というのがあるんですね。一軒一軒回覧板を回したり、そういうものを活用したり、それから情報の発信ですね、これがものすごく大事なんです。チラシを作っても一軒一軒に配るという活動をやることによって、地域がものすごく盛り上がりますので、私は今日、皆さん方の大学の若い力、これが本当に大切だなということが勉強になりました。本当にありがとうございました。



兵庫医療大学
東洋医薬部門構成

漢方の里まつりに参加したメンバー

5年生	8名
4年生	1名
3年生	2名
2年生	10名

活動内容の概要

事業目的
 丹波農産物や薬用作物の新たな活用法
 使用されていない利用可能な資源を発掘

↓

セルフメディケーション
 を指向した有効活用法

7月の活動
トウキ栽培体験
丹波市山南町和田

今後の活動に関する意見交換会
 丹波市山南町和田
 丹波市立薬草薬樹公園

山南町和田地区での活動目標

【地域の希望】
 漢方の里、薬草栽培地としての再興

↳【活動目標】

- ・ セルフメディケーションを指向したトウキ葉を使ったレシピ考案
- ・ 丹波薬草振興を指向した生薬や丹波の薬草文化に関するポスター作成

漢方の里まつりでの情報提供

8月・9月の活動
レシピ考案 兵庫医療大学

8月・9月の活動
丹波地域の薬草文化に関するポスター作成
兵庫医療大学

10月の活動

漢方の里まつり

丹波市山南町 丹波市立薬草薬樹公園



これまでの活動を通じて感じたこと

薬草の産地としての実績や知見の豊富さ
漢方の里として再興させたいという要望

レシピ考案

- ・地域に貢献できたこと → 漢方の里まつり への参加を通して…

地元で栽培されるトウキを紹介できた
普段の食事から健康を意識することを提案した

- ・活動において 苦勞 したこと → レシピ考案 保存方法

今後の活動について

- ・活動を続けていくための課題

丹波産の薬用作物や、丹波農産物との
コラボレーション

地元の方々の健康増進を目指した

セルフメディケーションのご提案

ポスター作成

- ・地域に貢献できたこと → 漢方の里まつり への参加を通して…

地域の方々に
“漢方”という誇るべき日本の医学
丹波市の漢方文化の成り立ちや丹波で栽培される生薬
漢方についての基本的な知識
を紹介できた

- ・活動を続けていくための課題

地域の活性化のためにはまず
『“地元の方”に“地元文化”を
いかに知ってもらうか』

- ・掲示だけではなく冊子を作成する。
- ・地元の方に、漢方に対する印象をたずねるアンケートを実施する。

今後の予定

さらにトウキ葉を使用したレシピ考案

新しいレシピの試食会(2月か3月)



丹波市立薬草薬樹公園にて

活動場所

- ・兵庫医療大学
- ・県立薬草試験地(山南町)
- ・実証栽培畑(山南町)
- ・薬草薬樹公園(山南町)

お世話になっている地域団体

兵庫県農林水産技術総合センター 農産園芸部
丹波農林振興事務所 農政振興課
丹波農業改良普及センター
丹波市立薬草薬樹公園
山南町薬草当帰生産部会

(7) Wake UP 柏原

そうしましたら、最後から2番目、あと2つの団体だと思しますので、皆さんもう少しよろしくお願ひします。私たち関西学院大学 Wake UP 柏原ということで活動させていただいております。まず、今日の目次とかどういふことを話すかということなのですが、団体概要、活動報告、今後の活動、その他ということで、お話しさせていただきます。

まず、私たちの関西学院大学なのですが、皆さんあの時計台をイメージされる方がいらっしゃるかと思うんですけども、そこではありません。上ヶ原じゃないです。三田です。山奥です。寒いです。そこから来ています。ゼミが3つのゼミに跨がってしまして、全員で9名で活動しています。うち一人が修士で、あとは全員学部生という形になっています。一緒に活動させていただいているのが、柏原まちづくり協議会及びTMOまちづくり柏原さん。

どういふことをしているのかということですけども、大きな枠として2つあります。もともと柏原では、ずっと関学は携わらせていただいていたのですが、そこにプラスアルファで僕たちは何ができるのかということで、一つは地域にちょっとエネルギーとか元気をを入れるためのイベント関係、下の方ですね。もう一つの方が、まちづくり柏原さん自体が中心市街地活性化計画の第2期を策定されたので、それに向けて提言作成というのをやってみてはどうかという形になっています。主にその提言作成の中には、3種類、駅前、ストック、ストックって空き地、空き家なんですけど、それから公共空間関係。公共空間が3つに分かれてしまして、街灯照明、公園の活用、ハピネスマーケットっていうことでちょっとこれは、場所というよりは、柏原で行われている活動なのですが、そのマーケット、定期市をどのようにしていけば良いかというような形になっています。イベント企画との兼ね合いとしましては、上の方で調査して、もう少し意見が欲しいなということイベントの方で聞いたりだとか、イベント企画に来ていただいた方々のご意見をいただいたりだとか、という形でぐるぐるぐるぐる回るようなサイクルをイメージしています。

活動報告で、見ていただいたら分かるんですけど、これ全部を7分で発表するのは無理なんですね、正直。申し訳ないですけども。なので、今回の活動報告に関しては2点特にピックアップしてお話しさせていただきます。その1が駅前班、こちらにいる二人がそうなのですが、駅前班からのお話。それから、8月にはなってしまうのですが、イベント企画、ちょっと大きめのことをさせていただいたので、そちらに関してお話しします。

私たち駅前班は、駅を含めた駅前やJR利用客の増加を目指して、あとは駅前広場の有効活用を促進するために活動をしています。こちらが私たちがやってきたこれまでの活動を時系列に表したものです。

まず5月に、駅周辺を歩いたり、写真を撮ったりして周辺を調査しました。そのあと、利用者数を調査したり、それから他駅との比較をしたかったので、周辺の駅を散策したり、あとは、柏原駅の駅長さんにインタビューをしたり、そして最近では最終的に提案をするために駅の実測を行いました。こちらが先ほど調べたと言った一日の乗降客数です。平日と休日で分けて調べると平日の方が多いたことが分かってもらえると思います。乗降客数の年齢割合を見てみると平日は圧倒的に15歳から20歳の割合が多くて、この理由ですが、主に、柏原高校という高校が近くにあるのですが、その高校生の利用が多いということが分かります。休日は、ほとんど年齢にはムラがなく乗降していることが分かります。

先ほど申したように、他駅との比較を僕たちはしたのですが、こちらがJR石生駅付近です。まず、柏原駅との違いを見出したかったので、石生駅と柏原駅の違いを何点か考えてみました。僕たちが考えたのは、まず改札口が石生駅は西側と反対側にあるのですが、柏原駅は改札口が一つしかない点が挙げられます。こちらの左側になるのですが、そちらにトイレが石生駅にはありまして、そちらには車いす用のトイレがあるんですけども、柏原駅にはないです。あと、待合室も違いまして、外に石生駅はありますが、柏原駅は中にエアコンが付いている待合室が設けられています。周辺施設との兼ね合いですが、石生駅の周りには、住宅かJAさんくらいしか施設がなくて、一方で柏原駅は、飲食店が数軒あったりだとか、JAさんがあります。あと、道との兼ね合いですが、石生駅は県道をちょっと入り組んだところにあって、正直僕たちが初めて行ったときもちょっと分かりづらい感じでした。柏原駅は国道176号に面しているのですごく見やすくはなっています。

こちらが福知山駅です。同様に待合室の違いに着目しました。待合室は柏原駅と同様に中であってエアコンもあります。待合室とトイレと飲食店が隣接しているの、福知山駅は電車を待っている間も退屈しない空間になっているなど感じました。次に広場の空間です。この写真ではちょっと分かりづらいのですが、南口に実物のSLが置いてあったり、ポケットパークのような公園の施設があることで、すごく広場空間が利用されているなど感じました。あと、福知山駅は3つの路線が面していてすごく電車が多数の駅なのですが、柏原駅は地上に線路があり、福知山駅は高架というか階段で上がったところに線路があるので、1階は施設の利用だとか広場の利用に使われているという違いがありました。先ほど道の話とかをしましたが、福知山駅と柏原駅の自動車の違いが、柏原駅は結構広場が狭くて、タクシーとか自家用車がまとまって待ってるんですけど、福知山駅はタクシーと自家用車が別々になっているので、区別が付きやすいという点と、見て分かるように、こちらが歩道なので、歩者分離がしっかりされていて、安全面でも、景観としても、機能性としてもすごい福知山駅は優れているなど感じました。

先ほど柏原駅の実測をしたと申したんですけども、こちらが実測をしたことによる見取図です。上が柏原駅の1階で、2階が下ですね。今後の駅前班の展開としては、内部空間や広場、周辺施設に着目してきましたが、こちらから最終的に設計の提案をしていきたいと考えています。その理由は、やっぱり駅というのは、ただ単に電車、公共交通機関の利用だけじゃなくて、やっぱり複合施設としての利用があるべきなのではないかと考えたので、こちらの内部空間、広場、周辺施設を全て見た上で、歩行者や車との兼ね合いだったりだとか、柏原の景観の良さだったりだとかを最終的に設計提案して、図面や模型によって可視化することによって柏原駅やまちが今後どうあるべきなのかを考えていきたいと思っています。

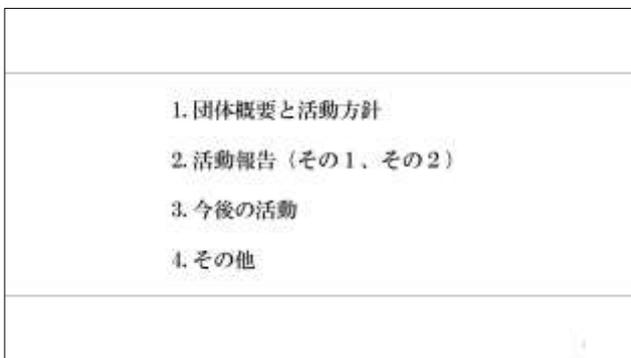
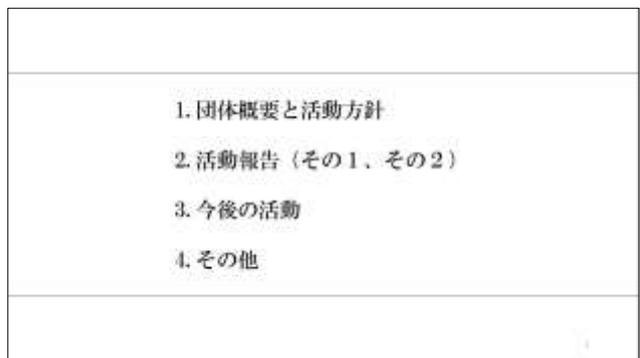
ちょっと時間がオーバーしていますので、少し駆け足で行きます。イベント企画、賑わいの創出とかいろいろあるんですけども、写真でお見せします。どのようなことをしたか、8月6日に、お手製ドリンクと演奏会ということをしました。KGカフェ、「なんでWake UP 柏原じゃないねん」と言われるとちょっとあれなのですが、このような形でスタジオの前をオープン開放して、中でバイオリン等の演奏会。この日は、ハピネスマーケットっていう先ほど出たんですけど、ナイトマーケットという形でやっていたんですね。なので、それと一緒にやりまして、夜もずっと行きました。演奏の合間にはこのように一緒にふれあってもらえるような時間を作りまして、実際にはこのような形で演奏しました。形としては、このようなイベントだったのですが、多分、単体でやったらここまでいろんな人が来てくれるって多分難しかったと思うんですね。なので、こういった地域だからこそ、いろいろな活動と一緒に連携をしてやることで、よりいろんなお客さんにおもしろい要素の中を周遊してもらえるとこの可能性はこれで少し見え始めたのかなと思っています。なので、今後イベントをするにしても、単体でやるっていうのも一つですが、何か他の、私たちだけではない地域の方がやっているイベントと一緒に提携してやっていくっていうのは、必要かなと思います。

そのほかストック班、街灯調査、公園、ハピネスマーケットとありますが、これはお時間の関係で割愛させていただきます。私たちこういう活動を予定しているんですけども、一応単年計画という形で来年度以降に関しては、中心市街地活性化計画に提案するという形を取らせていただきたいと思います。ただ、今回本当に中間となってしまっていますので、年度末に私たち自身の報告会というのを柏原町をお借りしてできないかなと画策しています。これに関して、まだ計画段階ではあるんですけども、もし可能でしたら、他の団体の皆さんと一緒に報告会をできたらおもしろいんじゃないかなと思っています。「柏原なの？」って言われると、ちょっとあれなのですが、より良いというか、具体化したものを地元の人に返していくというのは、やはり必要だと思いますので、それを最後にしたいなと思っております。

それでは、広報です。来週17日、これ私たちメインというわけではなく、2回生がメインなんですけれども、同じ柏原の関学スタジオでイベントを行います。ちなみに、こちらで私たちのチームの中の街灯調査のチームがアンケート調査、写真を見ていただいて、それに対してどういうふうな印象を持ったかという調査をさせていただきますので、是非お時間ある方は、柏原ないしは関学スタジオに足を運んでいただけたら幸いです。ありがとうございました。

〔連携先の株式会社まちづくり柏原の方からのコメント〕

失礼します。まちづくり柏原の武田と申します。よろしくお願いいたします。Wake UP 柏原ということで、青木くんを中心にずっと柏原の方に来てもらっています。私たちが受け入れているというよりも、本当に困ったときに助けてあげられるかどうかという立場でさせていただいていたんですけれども、ほぼ助けることもなく、自分たちで全て活動していますので、これからも何かあったら。多分地域の皆さんそうだと思うのですが、学生さんの熱い思いを私たちが受け入れる。受け入れる側も熱い思いがあるからこそ、何かしてあげたい、手伝ってあげたい。皆そうだと思います。これからまた活動の中で、こういうイベントの企画であったり、いろいろさっき出していたんですけど2期計画にいろいろ提案をしてくれるとか、そういうことを言ってくれていますので、是非そういう提案をこちらでも受け入れさせていただいて、次回に繋げていけたらなと思っております。ありがとうございます。



2. 駅前広場

その1

◆ 駅前班



その2

◆ イベント企画

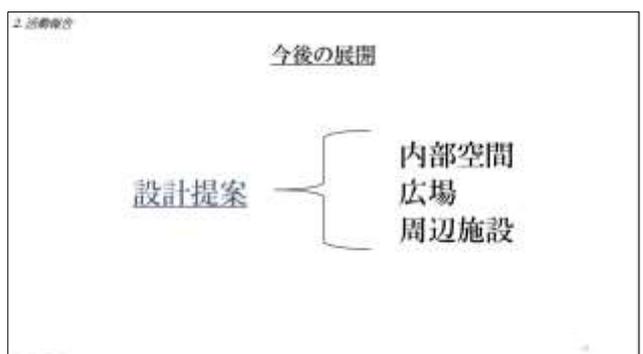
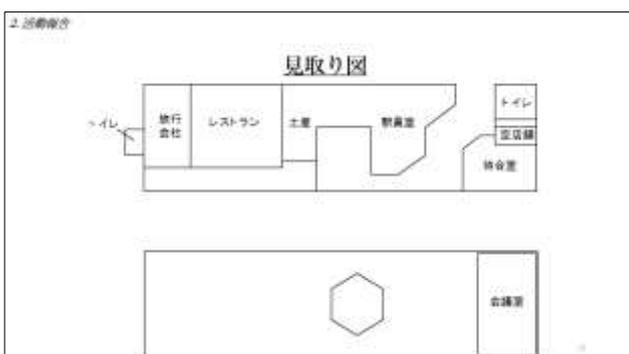
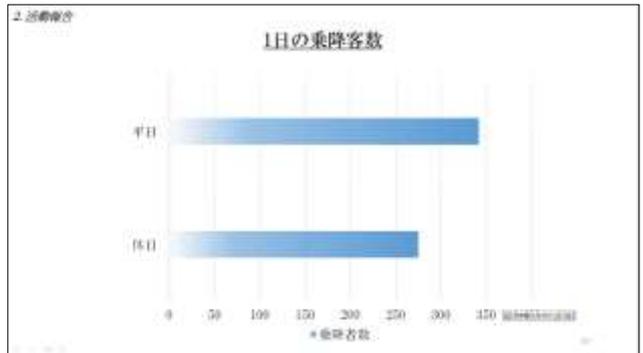
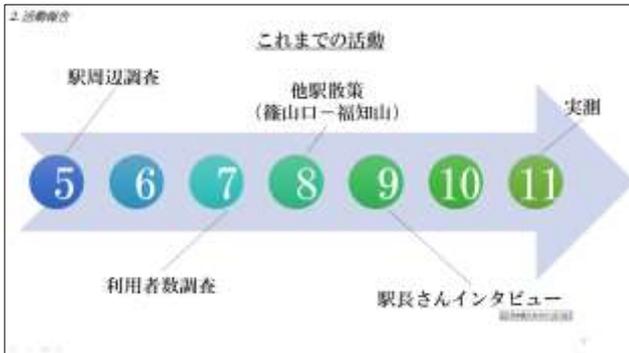


2. 駅前広場

その1

◆ 駅前班

駅、JR利用客の増加を目指す
駅前広場の有効活用促進



2. 活動報告

その2

◆ イベント企画

販わいの創出
活動の認知
調査のためのフィールド作り

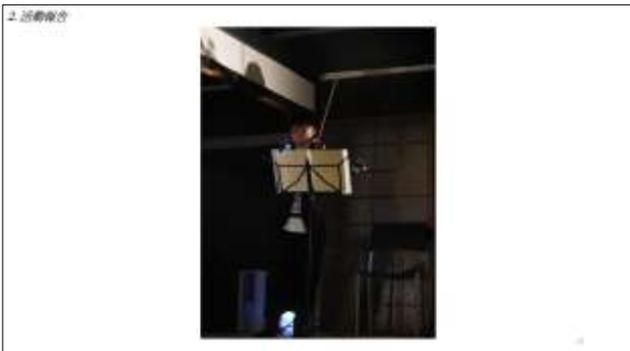
2. 活動報告



お手製ドリンクと楽しむ夏の夜の演奏会
[fast. 和歌山ナイトマーケット]

日時：2016年8月6日（土）
場所：関学松原スタジオ

古民家でのワンドリンクブリーの演奏会



2. 活動報告

ストック症

人気が少ない/交通が不便/空き家の数が多い
一空き家の活用による地域活性化

これまでの活動内容
現地でのアンケート
実地調査
関係調査（文献）

これからの予定
空き家を活用した地域の具体的な提案

2. 活動報告

街灯照明調査

「夜」の柏原に着目し、
どこを取り取っても素敵なまちにする。

これまでの活動内容
街灯アロート調査
印象評価のアンケートなど

これからの予定
分析・アンケート（追加）
新原におけるより良い「夜の世界」の提案

2. 活動報告

公園利用

公園利用の活用を活性化させる。

これまでの活動内容
公園周辺の定方観測による活用動向調査
四国イベントの調査
インタビュー

これからの予定
その観測の通知地域
今後の活用状況
[ex. ベンチの増設など]

2. 活動報告

ハビネスマーケット

ハビネスマーケットの仕組みと課題を明らかにする
ハビネスマーケットと動物の親和性を高める

これまでの活動内容
現地調査
ハビネスマーケットミーティング参加
主催者にヒアリング実施
ハビネスマーケットにて動物とヒアリング予定

これからの予定
・事例研究
・ハビネスボランティア参加による定数観測

3

1. 団体概要と活動方針
2. 活動報告（その1、その2）
3. 今後の活動
4. その他

◆駅前街
◆ストック街
◆公共空間

丹波市中心市街地
活性化計画

◆ 中心市街地活性化事業

平成28年度
Wake UP 柏原

平成28年度以降
柏原まちづくり協議会

年度末報告会の実施を検討中

4

1. 団体概要と活動方針
2. 活動報告（その1、その2）
3. 今後の活動
4. その他

Merry Christmas
かいばらい
2016.12.17
OPEN 13:00

(8) AGLOC

今からAGLOCの活動紹介をさせていただこうと思います。神戸大学農学部2回生の阿部です。よろしくお願ひします。ちょっとテンション上げめでいきたいと思います。

さて、こちらをご覧ください。『地域と、世界を、繋ぐ』と書いてあります。これこそ我々AGLOCの目標です。「学生風情にそんなことできるのか」と思う方もいるかもしれない。では、どうして我々AGLOCがこのような大それた目標を抱くようになったのか、これには日本の農業の現状が関わっています。ほとんどの皆さんがご存知のとおり、現在日本の農業はさまざまな問題を抱えています。「日本の農業には希望が見えない。未来はない」といった声すら聞こえてきます。でも、本当にそうでしょうか。どんな状況でも行動を起こせば、きっと希望は芽吹いてくれる。では、どんな行動を起こせば良いのか。地域での活動の合間、漠然と考えていました。

ある日、自分の活動の話をしていたとき、一人の留学生が興味を示してくれた。留学生です。アメリカからの留学生、ユタ州出身の人です。「農村での活動はとてもおもしろそうだ」そこでふと思いついた。彼ら、留学生、仲間となら日本の農業に希望を見出し、花を咲かせることができるのではないか。これがAGLOC設立のきっかけです。では、AGLOCとは何か。AGLOCは、“Agricultural”、“Global”、“Local”活動拠点の篠山市岡野地区、“Okano district”、“Circle”の5つの英単語の頭文字で、これには、地域、農業、世界を一つの輪で繋ぐんだという強い意志が込められています。次に我々の理念。それは今まで目を向けられて来なかった日本の地域の魅力を留学生を巻き込むことで世界に発信すること。そのためにまず、留学生を巻き込んだ新しい学生団体のモデルとなることです。さあ、そんな理念を達成すべくAGLOCがどのような方針で活動しているのか。我々の活動は、『魅せる』、『馴染む』、『広める』の3つの段階を踏むことで、地域に留学生を巻き込み、彼らとともに地域と世界を繋げるものとなっています。

具体的には、まずは『魅せる』。ここでは、日本と言えば東京、京都、大阪しか知らない。農村部にも行ってみたい。そんな留学生に地域の魅力を見てもらおう活動をしています。例えばこれは、毎月行う農業体験。AGLOCのメンバーと農家さんのお手伝いをします。農家さんと留学生、いかにもミスマッチで始めは反対意見もあった活動ですが、実際にこのようにすっかり打ち解けています。さっきCHOKOBEのビデオに出ていた農家さんがここにも出ているんですけど、イタリア人の留学生と握手してイタリアの挨拶を何故か黒豆の畑でやっているとところですね。また留学生の持つ異文化が地域の農家さんにとって刺激となっており、「彼らが来るのか待ち遠しい」とこの方も仰っていました。地域のA4版観光マップを作成し、使ってもらうことも『魅せる』活動の一つです。次に『馴染む』。ここでは地域を知り、繋がりを持つようになった留学生により地域に馴染んでもらうために、彼らとともに地域の施設でウェルカムキャンプを実施しました。また、地域との交流として、農家さんをお呼びしてのバーベキューや地域の祭りに参加することで、地域文化への理解を深めてもらっています。最後に『広める』。地域での情報を世界に広めるために、Facebookで彼らの体験を自身の言語で発表してもらっています。今ここは英語で書いていますけれども、中国語、イタリア語等、今後発信していただこうかなと思っております。また地域の丹波新聞の方で取り上げていただいたこともあります。

次に、地域の魅力を伝える効果的な手段となる特産品の海外輸出に関して、先ほど食べていただいたCHOKOBE、実は岡野地区で作っております。岡野地区でお世話になっているところと神戸大学のフィールドステーション、あと我々のサークルのメンバーで委員会的なものが構成されておまして、CHOKOBEが開発されて販売の一手手前があると。でも、まあ、いろんな意見があると思うんですね。アンケート見たら分かると思うんですけど、「ニーズはない」という意見も味まつり等で販売したときはありました。留学生の視点をもって、この特産品を改変する。海外志向に改変することによって、香港や台湾等に輸出できるんじゃないかということ画策しておまして、これに関しては、県の消費流通課の課長さんにお話を伺って、今話を少しずつ進めようかなと思ってるところです。このような形で留学生を地域に巻き込み、作り上げた世界との繋がりを軸に我々は活動しています。

では、活動初年度の今年、我々はどんなことを活動の成果としてあげられるのか。まず1つ目、これは計11カ国17

人の留学生を地域で受け入れました。今は 12 カ国 19 人です。この間会ったインドネシアの人が来たんですね。定着したメンバーが 7 人。今 24 名いますけど、留学生がそのうち 7 人です。2 番は農林水産省主催の『食と農林水産大学生アワード』ファイナリスト選出。これは、全国の農林水産系のサークルが一斉に応募して、農林水産省が審査を行って、10 団体のファイナリストを選出します。それにファイナリストとして選出されました。残念ながら、農林水産大臣賞は取れませんでした。全国の東京であるとか、京都であるとか、いろんな団体のいろんな農林系に対して意識の高い学生さんと話ができて良かったなと思っています。写真は、やくみつるさん、審査員の方ですね。3 番、メディア掲載。丹波新聞社の方に一面に掲載していただいたりだとか、学生のマイナビっていうバイトの広報誌みたいなものがあるんですけども、その執行役員の方が審査員をしていた関係で、載せていただいたりもしました。4 番、篠山市岡野地区における特産品開発協力。これに関しては、先ほど（他団体の報告で）ちょっと『実践農学』の話が上がっていたんですけども、神戸大学は岡野地区で『実践農学』というサークルとは全く別の授業を行っておりまして、そちらで丹波篠山の名産品、山の芋を使いまして『山の芋パンケーキ』というものを独自に開発いたしまして、これがクックパッドで一位になりました。以上のような活動が我々 AGLOC の初年度の活動成果です。

さて、AGLOC、いかがだったでしょうか。一見かけ離れていた地域と世界はこんなにも近づけることができる。きっと日本各地、もちろん皆さんの周りにも地域の魅力が眠っていることでしょう。さあ、ともに咲かせましょう。そして一緒にこの花を世界に届けましょう。地域と世界を繋ぐ農業の未来のために。

ご静聴、ありがとうございました。





①魅せる

農業ボランティア

学び

刺激

地域観光の補助

②馴染む

地域でのイベント

Welcome Camp

地域との交流

農家さんと呼んで

留学生とBBQ

デカンショ祭り

③広める

情報発信



特産品の海外輸出



Achievements

2016年 活動の成果



1. 計11カ国 17人の留学生を
地区で受け入れ
(定着メンバー7人)



2. 農林水産省主催
「食と農林水産大学生アワード」
ファイナリスト選出



3. メディア掲載
・丹波新聞社 (一面 2回)
・マイナビ



4. 藤山市岡野地区における
特産品開発協力

レシピ50品



6. 地域課題解決で誕生したお菓子「ちょこべ」の紹介

神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ 研究員 衛藤 彬史

度々失礼いたします。衛藤と申します。

今、各テーブルに協力いただいて、四つ折の冊子とお菓子を2つずつ配布させていただいております。実際は箱に入っているんですけど、今回はディスプレイという形で机の上で実際に手にとって見ていただく形をとっております。早速、食べていただいている方もいらっしゃるんですが、どういう思いで、どういう形で商品開発に至っているのか、といったところを簡単にご説明させていただきたいと思っております。食べていただいて、パッケージを見ていただいて、コンセプトを聞いていただいて、アンケートにご回答をいただければと思います。

これは商品のイメージのポスターで、ブースに出す時にはこのような形で紹介させていただいております。動画のほうを見ていただきたいと思います。この方が地域の山の芋の農家さんです。県の品評会に出展して賞をとっていらっしゃる方です。

今回、本当は僕よりも製作にメインで関わっている板垣という、神戸大学の研究員がもう一人いまして、さらにその開発に関わった学生にも（このフォーラムに）参加してもらおうと思っていたんですけど、都合がつかなかったり、体調が悪かったりで、代わりに報告をさせていただいております。

動画を見てもらった通りですが、これまでの神戸大チーム（サンセット 12、ささやまファン倶楽部）の報告にあったように、『実践農学入門』という篠山で活動する授業がございまして、岡野地域というところに入って活動した学生達が、農作業の作業の大変さ、せつかく掘ったのに、掘る時に芋に傷をつけてしまって売り物の価値がなくなってしまうとかで、「生産者はとても大変だ」ということを経験した学生達が、今活用されていない小さい芋や傷の入った芋、価値のつかない芋を加工品にして、少しでも農家の収入にバックできないのかな。そういったところをきっかけにスタートしています。

ビデオの後半に出てきましたが、（このお菓子の製作にご協力いただいた）大福堂さん、篠山でずっとやられていらっしゃる和菓子屋さんです。和菓子屋さんなので、今回『かるかん』という山の芋を使った鹿児島のお菓子ですが、「かるかん」までは作れるんです。けれど、チョコレートと最初言った時「えっ」と言われました。「なんで、和菓子屋がチョコレート」って言われたんです。けれど、学生がそれでやった方が、今までの「かるかん」にしても山の芋にしても、馴染みが無いから知ってもらおうと思ったら、そういうほうがいい。ということで、「それならしゃあないな」と言ってもらい開発を進めていただきました。

今回、実際に開発に関わった学生に紹介してもらおうと思っておりましたが、来られなかったので、代読という形でその思いみたいところを紹介させていただきます。

神戸大学の応用食物学コース2年生の岩崎さんですけど、『私は「ちょこべ」の開発に関わることで非常に貴重な経験をすることができました。「かるかん」に練り込む山の芋を試行錯誤したり、チョコレートの種類を決めたりする商品開発から試作品のアンケートをとるリサーチ調査、また、パッケージを決めや箱に入れるフライヤーのデザインなど多く過程に携わることができました。このように1つの商品の開発の全ての過程に関わる機会は、大学だけではなく社会に出てからも中々あるものではなく、とてもありがたく思います。』ということで、農家の方、お菓子職人の方、そういった思いをもった方を尊敬して、一緒に商品開発できたことをありがたく感じております。

『ちょこべ』は、この11月20日から商品化ということで和菓子屋さん、大福堂さんと篠山圏でもう1軒で取り扱っていただいて、今まさに新商品でスタートしたところです。

7. 講評

関西大学佐治スタジオ 出町 慎 先生

8つの団体の発表を聞いてみると、いろんなものが浮かび上がってきました。共通して見えてきたのは、学生が活動して困ったときにブレイクスルーしていくには地域の力というところと、地域側も何か新しいところへ行きたい、若しくは今ある課題を超えていきたい、といった時に学生との協働がすごい力になっていることが、今回のフォーラムで見えてきたのかなと思います。ですので、協働ですね。そういったことをやり続けるといったことは意味があるんだな、と感じた発表会だったと思っています。



兵庫医療大学 岩岡 恵実子 助教

今日は皆さん貴重なお話をたくさん有難うございました。兵庫医療大学は今年度から初めて参加しましたので、色々教えていただきたいことが一杯ありますので、今後ともよろしくお願ひいたします。菓草クッキーが胡散臭い、というのも本当にその通りで、そういった意見もいただきながら私達に何ができるのかを考えていきたいと思っていますので、どうぞ今後ともよろしくお願ひいたします。



神戸山手大学 高根沢 均 准教授

皆さんお疲れ様でした。私たちの学生グループはジビエということと福住の活性化ということをお話しさせていただいたのですけども、いろんな団体がそれぞれ活動をやっていて、それぞれ面白いことをやっていて、それぞれ課題を抱えながら頑張っているんだということをどう共有していくかということ、年1回ここで終わって、次の年は違うメンバーが引き継いでいけないというか、そういう感じがするので。去年から参加して思いますが、もっと継続的にいろんな大学が参加している知恵と経験と熱意を共有していく仕組みをこの補助金制度の中でもっとできたらいいなと。全団体の中から参加してやるようなひとつのフィールドがあったりとか。そういうことで地域と学生が頑張っているから皆刺激を受けあいながら成長していければと思います。



神戸親和大学 岸上 龍平 教授

お疲れ様です。先ほど、本学の学生がプレゼンした時にシステム思考という話をしたんですけども、大事なことは皆さんの問題意識と解決策がありますよね。解決策は自分達で抱え込んで全部解決策を自分たちでやろうと思わないことですね。必ず、今日お伺いしただけでも、兵庫医療大学の先生とも話していたんですけども、これはうちとぶついたらもっと解決するな、よくなるんだ、ということがたくさんあるんですよ。できるだけこの繋がりを大事にして、頭の記憶、感覚的に、「あ、これいいな」と思っているうちに繋がって、取り入れてそれぞれの解決策をより良くするようにしていただけたら素晴らしいなと思います。どうも今日はありがとうございました。



関西学院大学 山下 淳 教授

皆さん、お疲れさまでした。今日は私にとっても色々発見があって、とても面白かったです。とりわけ印象に残ったのは、皆さんが常日頃大学で学んでいること、建築であったり、農業、農学であったり、薬学であったり観光であったり、そういう学んでいることを地域での取り組みにうまく活かすとか、地域の人とのつながりの中でうまく活かしているというのが、地域でうまくいっている一つの要因かなというふうに思いました。(会場は)

寒かったし、(フォーラムは) 4時間以上で頭が働かないので、以上になります。



甲南女子大学 佐伯 勇 教授

私は産学連携は参加したんですけど、4月からこういう取り組みを始めました。地域連携でこういうイベントは初めてで「どんなかな」と思って来ました。すごいですね。皆さん頑張っているらしいですし、何より皆さんが楽しんでいる部分がわかったし、地域の方もまた一生懸命応援と一緒に楽しもうとしている気持ちが分かりました。皆さんは実感しているかわかりませんが、すごく成長して、これが将来に役立つと思うんですね。これは皆さんがリーダーだと思っています。いっぱい大学の中で広めてほしいと思いますので、皆さんも情報発信をがんばってもらって、こういう取り組みを広めることによって、みんなが嬉しいとかよくやっているとか、そういう気持ちでやってもらえるといいなと思います。これからもよろしく願いいたします。



関西学院大学 清水 陽子 准教授

皆さん、お疲れさまでした。8団体の報告を聞かせていただいて私も大変勉強になりました。いろんな先生からありましたけれども、活動自体はそれぞれの大学でされていると思うんですけども、是非こういう機会でも他大学との交流であったりとか皆さん同士が交流をして、一緒に何かできる企画とかというものが今後取り組んでいただけたら、更に面白くなっていくんじゃないかと思いました。最初に衛藤先生が、できること、やりたいこと、求められること。この3つはすごく大事だと思うんですけど、聞かせていただいていると皆さんがやりたいと思っている気持ちが大事で、そこをもっともっと大事に。やりたいんだということをもっと発信していただきたいですし、それプラスやりたいだけではなくて、出来ることをもっともっと皆さん自身強めていただいて、「これだけのことができるから、これがしたいんだ」というものを地域にどんどんぶつけられるように、さらに皆さんがパワーアップしていくことを期待しています。お疲れ様でした。

